糸賀一雄 生誕100周年記念出版

ミットレーベン

故郷・鳥取での最期の講義

mit Leben

糸賀 一雄 （編／國本 真吾）

第14回全国障がい者芸術・文化祭とっとり大会実行委員会

ミットレーベン

故郷・鳥取での最期の講義

mit Leben

糸賀一雄 生誕100周年記念出版

第14回全国障がい者芸術・文化祭とっとり大会実行委員会

頒布価格500円

ミットレーベン

故郷・鳥取での最期の講義

mitleben

近江学園の園長室にて
写真提供：公益財団法人糸賀一雄記念財団

映画「この子らを世の光に」のフィルム
所蔵：鳥取県立皆成学園

皆成学園での講義を終えて
写真提供：鳥取県立皆成学園

糸賀と近江学園の子どもたち
写真提供：公益財団法人糸賀一雄記念財団

この講義録は、昭和四三(一九六八)年一月一八日、鳥取県倉吉市の鳥取県立皆成学園にて行われた、糸賀一雄の故郷鳥取県の地における「最期」の講義である。平成二四(二〇一二)年、同学園内にて発見された講義を記録したテープが文字化されたが、その後、糸賀の没後に学園が発行した「かいせい」特集号第二二号(昭和四四年)で、同じ講義の講義録が掲載されていることが判明した。これらを基に、編者の責任において編集し直したものが本書である。

編集に際しては、編者による若干の修正はあるものの、糸賀一雄が発した言葉を忠実に再現することとし、ほぼ録音されている通りの完全版となった。なかには、現在では使われない言葉(例:精神薄弱→知的障害)が登場したり、「障害」の「害」の字表記に関しても「障がい」とするかで意見が分かれたりするところである。また、言葉(発言)の表現についても現在では不適切とされるものも含まれる。しかし、本講義録の歴史的資料価値を重んじ、その箇所に手を加えることなく、そのままの形で表現していることを断わっておく。

ミットレーベン

故郷・鳥取での最期の講義

皆さんおはようございます。今日は、こういう機会を作って頂いたもんですから、私は時々こちらの方はお訪ねするんですけれども、今日もまた、大変懐かしい思いで、昨晩は関金に泊まりまして、先生方ともしばらくお話をした。時々、大学なんかで、あちこち講義がございまして、三十時間とか、あるいは六十時間とか、毎週二時間ずつ一年間講義しますと、六十時間ぐらいになるんですね。それから、それは何単位というんだったかな、四単位ね。それから、三十時間というのは二単位ぐらいになる。これは半年。そういうふうな、いろいろ計画がありまして、精神薄弱の特殊教育というようなことで、学生さんたちを相手にお話してもう十年ぐらいになりましょうか、やってまいりました。

そういうような勉強はですね、精神薄弱児とは何かというようなことからね、お話を始めるわけなんです。これから学校の先生になりたいというような人が学生であったりしますが、まあ私は精神薄弱児とは何かというような勉強を大学なんかでしておられる方によく言うのですけども、何かこう心理学の方のね勉強とか、あるいは医学の方から精神薄弱はどういうものをいうのかというような言い方で、いろいろと研究的に話がなされますことに対して、それは勉強は勉強だから一応してもいいけれども、やはりこういう施設なんかにくると、一番良く分かるから、まず施設においでなさい。それから、施設で子どもとですね、一緒に暮らしてごらんなさい。そういうことが一番手っ取り早いし、また、良く分かることなんだということをお話しております。そこであの、大学なんかでは、頭の勉強だけをしているんですね。その理屈のほうを一生懸命で勉強をしておるんですけれども、本当にこの解ろうと思いますと、何と言っても一緒に暮らすのが一番いいわけなんですね。

いわゆるその私は、よくそういう言葉を使っておりますが、「ミット、ミットレーベン」(mitleben)ていうの。日本語でもいいんですけども、「ともに暮らす」。「ともに暮らす」って言うと何だかこうキザっぽいでしょ、言葉としてね。それで、英語のほうだと、「リブ・ウィズ」(live with)ということになる。これも何だか語呂が上手くない。ところが、幸いにですね、幸いかどうか知らないけれども、ドイツ語だとね「ミットレーベン」という言葉があるんですよ。「エム、アイ、ティ、エル、イー、ビー、イー、エヌ」ですね。「ミットレーベン」。ちょっと語呂がいいもんだから、私はよく、よくったってあの、誰にでも言っているわけじゃないけれども、仲間内でよくその話し合いの時にね、「ミットレーベン」という言葉をお互いに、日本語のようにね、使っているんです。

皆さんも専門家の卵のようだから、ひとつその「ミットレーベン」という言葉を若い方々覚えていて頂きたい。やっぱり、その精神薄弱の勉強は、「ミットレーベン」でなきゃ駄目だなんて、大いにと友だちにも吹聴して頂きたいと思います。「ミットレーベン」、まあその日本人が外国の言葉を使うのはキザだけどね。そういうような場合には、使ってもいいと思います。

だって日本語で外国の言葉が、日本語になってしまってる話なんかあるでしょ、たくさん。例えば、この精神薄弱の問題にしても、「リハビリテーション」という言葉があるでしょ。「リハビリテーション」ていうのは、もう今日では日本語ですね。あれを日本語に翻訳しようと思っても、なかなかそのいい言葉が見つからないので、しょうがないから「リハビリテーション」ていう言葉を使っている。

「リ」(re)という言葉はね、「リ」というのは、「再び」という意味です。「再び」。その「リ」と、それからもうひとつ「ハビリテーション」(habilitation)というのがね、この二つがくっついて、それで「リハビリテーション」(rehabilitation)、とこう言っているわけです。リハビリテーションというのが日本語になって、こないだでしたか、おととしぐらいになりましたかね、環太平洋のリハビリテーションの会議が、環太平洋会議というのが日本で開かれました。私は、何か病気したかなんかで、せっかく日本で開かれた国際会議でしたが、よう出ませんで残念でしたが。それほどね、もう今日では、いろんな国がリハビリテーションていうことを問題にしてきているんです。

で、リハビリテーションていうのは、最近ではリハビリテーションのセンターなんていうのが、日本にもできまして、そしてその専門職としてねOTとかPTとかね、そういう、OTていうのは、何だったっけな、「オキュペー

ショナル・セラピスト」(Occupational Therapist)かな、OT。それからPT、機能訓練なんかをやる人ね。それから職能訓練のようなものをやる人。PTとかOTとかね、それからSTていうのがあるでしょ、「スピーチ」(Speech)。言語障害を持っている人にね、言葉を練習させるというようなそういう専門職ができておるみたいで。ですから、今、施設とかあるいは学校教育の中で、特殊教育としてですね、専門の先生方がいろいろな勉強を子どもたちに教えて頂いております。これも専門職です。保母とか指導員とか教師とかね、これも専門職には違いはありませんが、さらにそのリハビリテーションの専門職として、今言ったようなね、PTとかOTとかそれからSTとか、そういうような専門のね勉強を日本でも取り入れまして、そしてそれには国家試験をちゃんと資格を付けるために設けまして、いい加減なことではその資格が手に入らないようにされたわけなんです。

で、こういうやり方というものは、全部リハビリテーションの中ですけれども、一番最初リハビリテーションということは、あえて日本語に言いますと、「社会復帰」ということを言うんです。日本語で言えばね。社会に、もう一遍帰って行くということを、「社会復帰」というんです。「社会復帰」というのは、これはもう身体障害者のね、ためにできたような言葉であったわけなんです。第一次世界大戦てのがあったんですね。終わったのが一九一七年くらいだったかな(編者注―ドイツと連合国の休戦協定が結ばれた一九一八年が終了とされる)。あの世界大戦が終わりました後で、アメリカでね、戦争で傷ついた人たちの手や足やあるいは場合によっては、頭に弾が当たったとかね。目が見えなくなったとか、びっこになったとか、いろいろな身体の障害が戦争のためにね、いわゆる戦傷者ができたわけです。戦争というのは、今まで働いておった人が召集をされて、そして鉄砲を持って戦場に出て行って、傷ついて再び国に帰ってきた。帰ってきたけれども元の職業というものに、もう就けないかも知れないでしょ。障害を受けたためにね。それで、日本なんかでも日露戦争の時の後では、いわゆる廃兵というてね、廃れるという字を書くんですね。兵隊が廃れたというやつ。もう使い物にならんやつが廃兵だと、こう言うてですね。

それから、第二次世界大戦の後でも、日本では最近でも、まあ最近ほとんど見ませんけれども、汽車の中に白衣を着て松葉杖ついたりしてね、そして、皆さんに喜捨を求める。汽車の中で喜捨を求めるのもおかしいけども、そういったようなですね、人たちも見受けたでしょ。ああいう方々というのは、いずれも戦場で傷ついて再び元の職業に就けない。アメリカでも同じことでありまして、第一次大戦の後でそういう人たちに対しまして、まず医学の方からね、治療してあげましょう。そして目の見えなくなった人には、視力を回復させるように。手足が無くなった人には、手足を義手、義足などを作って、そしてうんと練習をして歩けるように。あるいは物がつかめるように。いろいろと回復、機能回復をしていこうという努力があったわけです。今日でもあるんです。そういう努力を全部含めて、そういうプロセス、機能回復していってそして、もう一遍職業人として社会に帰って行くことができるまでを「リハビリテーション」と、こういうわけです。

だからリハビリテーションというのは、ただ医学のリハビリテーション。最初は医学のリハビリテーションという。治療とか予防とかいうのに対して、第三の医学というのがリハビリテーションだった。お医者さんの中では、リハビリテーションというのは、第三の医学だった。また、一般の健康増進とか、予防とか、それから治療とかいうのに加えて、第四の医学だという人もあります。第三番目か第四番目かは見る人によって違いますが、要するに医学としては実に新しい医学なんだと。社会復帰ということを考えていく、そういうのが医学としての立場からのリハビリテーションでありますし、それからまた職業的リハビリテーションということも当然考えられるわけですね。何かの今までとは違う新しい職業に就けるように、練習をさせなきゃいけません。手や足や体がいろいろ不自由になったんですけれども、それを回復して、医学的なリハビリテーションの後に、今度は機能訓練をうんとして、そして今度は職業人として社会に帰って行けるような職業的リハビリテーションというのを考えておるわけなんです。

さらに、そういうような職業が身につくとしましても、実はね、「やろう」という気持ちが無かったらできないもんなんです。保母さんだってそうでしょ。ただ、月給のために保母さんが働くというとすぐに飽きてしまうし、嫌になってしまうんですね。やっぱりそこには、私は保母としての、私は教育者としての、あるいは指導員としてのですね、使命というか、そういうものを自覚して、深い所に根の入っているような気持ちで仕事にぶつかっていくのと、それから「まぁ月給さえもらえれば結構です。何でも仕事は大して変わりないし」っていうのは、ドライに割り切ってやる人とありますけれども。どっちがいいか分かりませんが、よく銘々考えたらいいと思いますけれども、私はやはり心が定まって、そしてこれを本当に私はやりたいと思う意欲がね。やる気一杯というので、やる方が幸せだという気がするんですね。少々困難がありましても乗り越えることできますしね。「困難があったら楽な方に行けばいい。より良き生活さえ求めてればいいんで、何も仕事というものと心中することは要らんのじゃ」と、こういう考え方もあるかも知れませんけれども。どんな困難があっても、私はこれをやり遂げてみたいと思う。やり遂げるというようなところに人生の自分の意義があるし、また生まれてきた生きがいといったようなものも感じられるんだと。どんな大きな仕事ができるというわけなもんじゃない。小さな小さな仕事だけれども、この仕事の中に自分というものを本当にぶち込んでいくと。

そうですね、比叡山を開山したあの伝教大師が、近江学園から比叡山がよく見えるんです、あの叡山を開いていった伝教という誠に立派なお坊さんだった、一四〇〇年ぐらい昔の話かな。あの伝教大師がね、今日まで皇統連綿と続いておるわけですけれども、伝教大師のおっしゃった言葉の中に「一隅を照らすもの」という言葉がありますね。一隅、ひとつの隅っこの方をです。一隅だから、ほんの隅っこという意味なんですけれどもね。「一隅を照らすもの」という言葉があります。それがあの国宝だと。国宝というのは伽藍仏像をいうのではなくて、一隅を照らすような人、人材が国宝なんだということをいう。国の宝というのは、一隅を照らす人だと。私はあの、この言葉が好きなもんですからね、幸いに近江学園から叡山が見える。一四〇〇年の昔に、今こそ伽藍仏閣が立ち並んで、根本中堂ですとかね、いろいろ立派な建物があるけれども、これ一番最初にね比叡山

に入って行った時のね、その時の伝教さんはどんな気持ちだったろうなと思います。家も何にも無いんだから、掘っ立て小屋でもまず建てなきゃいかんでしょうね。あの比叡山は今、千年杉が生えているといいますけれども、その当時もうっそうとした山だったんでしょう。信長が焼いてからまた建て直したわけなんですけれども、最初からあんな建物があったわけじゃないでしょ。一番最初にね、あの山に入って行って、ここで私は修行をすると決心された時のね、あの比叡山の山の姿というものは、大変なもんだったろうと思います。よっぽどね、勇気のある人でないと入って行けませんよ。野獣がいるかも知れませんしね。食べ物には困るでしょ。住むにも、衣食住にまず困ります。本当に生きていけるんだという確信ね。本当に自分は立派な生き方をしようと思うんだと。だから死ぬることは絶対にないというね、確信が無いと動けないですよ。そういう確信をね、伝教さんが持っていなすったんじゃなかろうかと、私はあの山を見る度に思うんです。

今は自動車で上りますがね。遊覧道路ができたりしてね。ケーブルカーで上がったり、自動車で山肌を削って道路をこしらえてね。叡山のお坊さんたちも金儲けしておりますがね。あれ、だいぶん堕落しておりますわ。比べてみるとね。その元祖のね、元祖の元祖。本当にあの山を開いた宗教の一番最初のね、この踏み出しをなさった方の心境というものを時々やっぱり私らはね、静かな想いで見直す必要がありますね。

そして、その時は我が身に照らして考えてみるといいと思ってね。私は学園の庭に出て行くと、朝早くでもあの山を見ますとね、毎日そうではありませんが、時々自分がね、何か行き詰ったような気持ちになってくる時あるでしょ。そういう時にやっぱりあの山をじっとね、見つめていますと、「そうだ、一番最初に、何にもない所に、そして死ぬかも知れない所に、絶対に生き切れるということを信じて入って行った人がいたんだな」と思います。これが力ですね。おそらく伝教さんは、あそこの山の中に入りなすった時の心境は、直接聞いた人もないわけですけれども、おそらく私どもが想像致しますのに、ここで死ねば本望だったでしょう。で、反面においては、生きるに違いないという自由なる確信を持ってなさったと思うんです。自由な人間ていうものはね、自由に命を捨てることもできるような人のことを言うのです。自分の欲望なんてものは、より良き生活の

ためには、極みなく我々の欲望ってものは高まるものですけれども、今日の世界中を見て、日本を見て、まさにより良き生活のためには、何物も捨ててもいいと思うぐらいにより良き生活が求められておりますけれども、どんな値を払ってもより良き生活がいいと言っていますけれども。場合によってはね、自分が求めているものを自分自身と対決してね、これを押さえつけてしまうだけの自由というものが、私たちの本当の自由なのですね。手に入るものをみんな手に入れようという自由だけが自由ではなくてね、自分から進んでそういう自由を捨てることのできる自由というものが人格的な深い根を持った自由として、尊重されることがあるんですね。伝教さんなんかの私は姿を想像してみるとね、そういうものを持ってなすったなという感じがするんですね。だから励まされます。とっても励まされます。

そういったようなものを私は、自由人としての宗教家としてよりも、まあ宗教家としてでもいいかも知れませんが、自由なる人としての伝教さんをあの叡山に想像してね、あの山をお山を見るんですよ。そういうような私たちの生き方というものをね、そこから教えられる。その先生が何とおっしゃったかというたら、「一隅を照らすもの」が国宝だというんです。一隅とはね、天下を照らす人が国宝だなんて、おっしゃってないですよ。天下国家を照らすような人が、国宝だなんてことを全然言ってないんで、私はそれで嬉しくてしょうがない。とっても嬉しいのはね、そのひと言。一隅というのは、台所の片隅も一隅なんですしね。我々はね、一隅という言葉の中で、随分たくさんのことを思わせて頂きます。

精薄の施設なんかでですね、精薄のがんぜない、なんぼゆうて聞かしても分からないような、あの子どもたちと一緒に寝起きをして、ししばばの世話をして、青鼻をかんでやったりね。うんこしてもお尻の拭きようも知らんのですから、お尻の拭き方、紙の使い方まで教えてやって。あのぬるっとした感じをですね、手の先まで身体全体でその身震いするような感じというものを、あの精薄の子どもらと肌と肌の仲で感じ取っていく。まさにこれこそ一隅です。この一隅。精薄のお尻の穴を一隅と言うならば、お尻の穴を照らす人こそ、まさにこれ国宝なりということを伝教さんがおっしゃっていると理解することもできるわけでしょ。では私たちの心のまにまに、どんな理解をしてもいいと思います。一隅を照らす人、その人こそ国宝なりということをおっしゃって頂いて、ものすごい力です。私にとってはね。「お前は、天下を照らさなければ、国宝とは言えん」なんて言われると、もう最初からさじ投げてしまいますけどね。

だから、家庭の中にあって一家の主婦が、何も天下国家を論ずるわけではないけれども、毎日同じことを古ぼけた台所の片隅でね、包丁を片手にコツコツと家族のために、我が子のために、食事をこしらえ、そして冬になれば凍てつく水道をですね、凍てつかんようにその藁を巻き、縄を巻いて、そして温かくしていこうとするはかない努力を続けている一家の主婦ですね。隣近所とせいぜい、井戸端会議でお話をするぐらいしかない。一体、この人は何しに生まれてきたんだろうと思われるぐらいの人も、我も自らを省みてですね、何となく寂しく思うような時もあるもんです。けれども伝教さんは、それを一隅を照らす人だと、おっしゃったかも知れないものですね。その一隅を照らし得る、照らすということは、どういうことだろうということを、さらに今度は奥深く味わってみることができそうでしょ。できるですよ。奥深く味わえます。照らすという言葉はどういうことだろうな、というふうなことをね。そういう思索、そういう思いというものを深めていくような暮らし、これは私はね、とってもありがたいことだと思うんです。

ベトナムの戦争、羽田の事件。昨日は、佐世保の事件。こういう事件を見て、若い人たちが、そして日本人同士が、血で血を洗うような争いをしなければならないことは、私たちにとっては、ものすごい心の痛みです。ものすごい痛みです。これを見守っている母親の気持ちや何ぞが、報道されておりますね。私どもはもう、たまらない気持ちで今朝も新聞を見ました。何とかならないだろうかという祈りと願いを込めて新聞を見ました。と同時に、怒りを感じました。どこから来る怒りでしょう。その怒りは。その悲しみは、どこから来る悲しみでしょう。私たちの心の奥底にね、何かこれは間違っているということをね、囁くものがあるから、そこから

来る悲しみや怒りではないでしょうか。それが何だろうということを、私たちは、やっぱり静かに我が心の一隅を見つめてみる必要があると思いますね。我が心の一隅を照らしてみる必要があると思うんです。どこから来る悲しみや怒りでしょうか。そして、それは、私たちの生活の中で、生活という一隅の中で、どんな風に行動したらいいかということを考えさせてくれるものだろうと思うんですね。

そういう風に思ってきますと、そのリハビリテーションという言葉も、心理学的な次元で、心理学的、社会学的なリハビリテーションという言葉が、医学や職業リハビリテーションとともにありますけれども、私はですね心理学で取り上げている心の状態というような程度なものでなく、もっと奥深く、さあ、何と名前を付けていいかわかりませんけれども、このリハビリテーションという言葉の中に、日本的な新しい意味をもっともっと深く突っ込んで、考えていく必要があるんでないだろうかというふうに思うんです。精神薄弱の人たちや身体障害の人たちが、リハビリテーションでいわゆるリハビリテートする。社会復帰するという言葉の中には、どんな社会復帰の心構えが要るか、どんなやる気というものがそこに形成されるか、これがまあ眼目になるでしょうね。そのやる気の根本を今突っ込んでちょっと一緒に考えてみたんですけれどもね、そういうものが大切だと思います。

ただね、リハビリテーションという言葉は、再びハビリテートするということでしょ。で、今の第一次世界大戦でアメリカで起こりましたそのリハビリテーションというのはね、面白いことに、面白くはないかも知れないな、税金を使ってもね、リハビリテーションのために税金を使って治してあげたりするでしょ。お金が要るでしょ。幾らお金を使ってもその人が治ってもう一遍社会復帰をすればね、今度はそれは生産人として社会復帰をするのであるから、生産的な産業に従事して、そして税金が払える人になるでしょう、という考え方なんです。だから、税金を使ってもね、リペイドがありますという考え方なんです。アメリカでの考え方は、今日でもそう言っておられます。

ですから面白いことには、うんと手足を治してあげたり目を治してあげたりいろんなことで、就職をして。

そしてその人が今度はタックスペイヤー、税金が払える人、そういう人にまでなって下さると。おそらくその人が生きている間には、その人のために使った税金よりも何倍かが、社会、国家社会に還ってくるんだと、という考え方なんです。ギブアンドテイクだな。社会と本人との間にギブアンドテイクの関係ってものが、そこんところで成り立つから、ソロバンが合うということになるんです。ソロバンが合うなら、何ぼ金使ったって損にはならんわけだからね、せいぜい元々ということになるわけだから。全体として考えてみると、そりゃあ一人ひとりについては、ソロバンが合ったり合わなかったりするけれども、全体として見るとソロバンが合うというのが、リハビリテーションの考え方を支えている経済的な背景なんです。

私は、これは大変なことだぞと思いました。そうならば、身体障害の人が途中から障害を受けて、そしてリ・ハビリテーションならば社会に復帰する。もう一遍社会に帰るというんなら、それはそれでいいかも知れないけれども。元々ね、生まれながらにして精薄である。生まれながらにして重症心身障害児で生ける屍と言われたようにね、寝たきりだと。こういう人は、どないしたらいいかな。リハビリテーションなんて言ったら、もう一遍お母さんのお腹の中に入って行かなきゃならない。社会復帰とは、もう一遍その生まれない状態に入ることをリハビリテーションというのかいな。こういうことになる。そんな人にまたお金を何ぼ使っても、税金を払ってくれるようには滅多になりそうもないがなということになる。そうするとそのマイナスの方を、したたかに担当するのが、心身障害の中でも精神薄弱とか、またはそうだね、重症心身障害児という人たちね。こういう人たちにお金を使えば使うほど、全体としてはマイナスが増えやせんかということで、さあ税金を使うほうの側の、お役所の方々は出し渋りなさりましてね、なかなかお金使ってくれないんですよ。

ですから、終戦のあくる年に作った近江学園で、それから間もなくお金に困って私は県庁に行ってね、昔の同僚であった人に何とかひとつ出してくれないかと言って、頼みに行ったことがあるんです。そうしたらね、その財政担当の人がどう言うたかと言いますとね、終戦後ですから、食うや食わずの状態だったんですね。とっても困った状態だったんですが、その時にね、「あんたの言うことは、まあ一応分かるけれどもね、今日、まとも

な人間だって、ろくすっぽ教育を受けることができやせんのだ」と。「幾ら教育しても指導しても、普通にさえもならんような人間のために使う金は無い」とこう言いよった。これが、かつて同じ県の中で課長として仕事をいろいろ分担をしていた、そのよく知っている人間が、私が役所を辞めて近江学園という田舎の方で小さな小さな施設を作って、精薄の子どもたちがじゃんきち集まってきて、そしていろいろな点で行き詰って、県庁に応援してくれんかと言って頼みに行ったら、こういうことを言うんですね。私は、今でも忘れることできませんね。

世間の人の考え方ってものは、案外そういうような程度が多いんですよ。精神薄弱の仕事なんかやってんのは、大変立派な仕事だから、普通の人ではとてもできないいい仕事をやって下さっていて、社会のためにも大変ありがたいと思いますと、どうもありがとうなんて言うてくれる人は、そんなに居ませんのですよ。居ても口先で言うてるかも知れんのです。そうならばお金を出そうということになると、大学のために使う金と精薄の施設のために使う金と、どちらを決めましょうかなんて天秤にかけた時には、精薄の方は事情が明るくなってからにして、とりあえずやはり大学の方に金を使いましょう。なぜか。大学では、秀才、天才のような優秀なる人材を社会に送り出して、万民のためにプラスになることが大きいから。だからこの足しないお金は、こちらの方に使った方がいい。優先順位という。プライオリティね、プライオリティ。優先順位というものをですね、どう決めるかということが、その国の物の考え方の非常に大事な点なんでありますが、それを大学教育の方へ注ぎ込んでしまうんです。そして、精神薄弱の対策の方は、後回しになっていく。これは、日本だけじゃなくて、どこの国でもそうでした。長いこと精神薄弱の対策は遅れてきたわけなんです。

まだ目が見えないとか、足が不自由だとかいう肢体不自由、身体障害の人の方は、これでも人目につきやすいし、同情が買いやすいし、また理解も早く理解されるというようなね、わけだけれども。精神薄弱の方はね、中枢がやられているからね、中枢が。一番根本の。そしてまあ見るからにニコニコしてるから、あれ幸せそうに見えますわね。できることなら俺も来世はああいう風に生まれたいなんて、人を羨ましがらせるかも知れないんです。変な言い方だけども。何にも苦労無さそうな顔をして、ポカーと口を開けてですね。ベトナムも黒人問題も何もありゃしませんが、もう悩みなんて無さそうな顔をして、あれはあれで悩みは十分あるんだけれども、世間の人にはそれが分からない。ですから、羨ましがられて、あれは仏さんみたいなもんだなんて言われたり、場合によっちゃ天使のようなもんだと言われたり。あるいは、馬鹿だ低能だ白痴だ三文だとかね八文だとか、いろんな言い方で、千代紙という、千代紙なんて言うから、何だろうと思ったら薄いということなんだと。知恵が薄いということから、それで千代紙なんていうことが。誰だったか計算していたら、日本語で精神薄弱のことを九十ぐらい言い方があるとして言うんです。外国の言葉でも、随分学術的な言葉から一般的なスラッグ(編者注―スラング)というかね、そういう言葉に至るまで全部合わせますと、英語なら英語でも私も大分たくさんあるのを見たことがありますが、もう二十や三十ぐらいざらにあります。いろんな言い方をしてですね、世間の人はこれを小馬鹿にしてしまう。中には、馬鹿天才なんて言ってイディオ・サバンなんてフランス語ができていますね。イディオ・サバン。イディオットっていうのは、馬鹿という意味。サバンていうのは、天才という意味。馬鹿天才というような名前を付けたんですね。

それがあのこの間、だいぶん前になりますけれども、山下清画伯なんてことになって、裸の大将。山下清君は、しばらくあざみ寮という近江学園のブランチですが、そこにしばらく居たことがありましてね。あの人は、兵隊の位で何でも計算をする癖がついてんです。それで私にこういうことを聞くんです。「先生、ぼ、ぼくの絵は、兵隊の位だったらどんなもんだろう」と。こう言うから、「まあそりゃあ、お前さんの絵だったら将校だろうなあ」言うて、私は「兵隊よりも将校ぐらい、少尉か中尉ぐらいにはなるだろう」。「大佐にはならんか?」言うんで、「とてもとても大佐なんかってもんじゃない」って言うたら、えらい悲観しておりました。で、世間の人が、山下先生、山下先生と言って、もてはやすのを彼は知ってるんですよ。それが馬鹿馬鹿しいこと

であることも、何もかんも知ってるんです。

そして中にはね、デパートなんかで、展覧会があったでしょ。デパートが客寄せのためにあれを使うこと使うこと。関西方面でも大阪とか京都とかね、一流のデパートが、あれを即席の絵描きにしてね、そして、展覧会をやってお客さんも引き寄せて、商魂たくましいやつをやったわけですね。精神薄弱の展覧会も同時にやって、見世物なんです。まるで。まるで見世物。そして、大学の報道班の学生たちが、このデンスケ（編者注―テープレコーダーの商品名）を持って駆けつけてきて、そしてそこの会場に集まった人からいろいろその、意見を聞いて回ったりしてね。この新聞発行したり、大学新聞を出したりしておりました。私にデンスケのマイクを突きつけて、「先生はどう思いますか？」って私に言うから、「そうだね、私は中世に逆戻りしたと思ってんな」ってこう言ってやったら、「へぇ」ちゅう顔をしておりました。

中世紀にはね、何かしら特別なものとして、見世物になっていた。小人が、または精薄が。宮廷なんかでは、このピエロのような形で、そういう人たちが見世物にされていた。慰みものにされていた。ちょうど、非常に異常な、その障害をもっているような、クレチン系統の病気なんかを持っているような人かも知れませんが、その小人のような人ね。そういうようなのを見ると、明治時代だけれども、のぞきメガネというのがあって、そしてこの親の因果が子に報いパチンなんて、この叩きながらですね、その見世物にしていたわけなんです。あるいは小屋掛けして、そういうものをですね、片手の無い、指が六つあるとかね、何か言ってその子どもやら、人たちを見世物にしている。それと一緒だと。これまさにね、見世物だと。中世時代が逆戻りしているのだと。

今日は、教育と福祉の時代が来ているのに、イディオ・サバン、山下清画伯なんて言って、みんなが追っかけ回して。そして、デパートが客寄せにこれを使って。結構またみんなも「すばらしいすばらしい」と言って見に来て。「ほぉ、馬鹿がこんな絵を描くか」とこういうところに興味があった。絵が立派だから見に来たんじゃない。ちょっとぐらいましな絵が、描いたのが馬鹿だから、そこに面白さを見て、見に来ておるのであって、絵を見に来ているのじゃない。この絵を描いたのが、精薄であるというところに、異常な興味が沸き起こってるんだという。

施設を見学に来るおばさんたちが、ギョロギョロギョロギョロと中をのぞいて、子どもらが遊んでいる姿を見、働いている姿を見、しまいには、ご飯を食べている姿までのぞき込んで、そして「思ったより大人しいわね」とか言って、動物園でも見に来たような顔をしてですね、囁いている。「もっとどうかしてるもんかと思ったけど、普通やないの？」とこう言って囁いている。「普通やないかい」と言っている。随分失礼ですね。そして帰りがけには、「うちの子はあんなでなくて良かったわねえ」、なんてこう帰って行くんです。そういう物見高い、あるいは物珍しい、そういったような世論というものがあるのです。

ですから、精薄の人たちに対する社会的な関心と言いましても、本当に基本的な人権と言いますか、本当に我々と一緒なんだという認識というものは育たないんだ。育ちにくかったんです。終戦までの日本の社会の構造の中では、なおさらそうでしたが。終戦後、民主化したと申しましても、なおかつ今日はその正しい認識を得てもらうための戦いが続いているわけでしょ。どういう戦いでしょうか。私たちは、本当にさっきも言いましたような意味で、ものすごい悲しみと憤りを感じておりますけれども。しかし、腹を立ててしまったんでは、これはどうにもなりません。ただむやみに憤激して腹を立てて、世間のやつらは一向に我々のことを理解してくれないと言ってですね、腹を立ててばっかしいましても、一歩も進みません。

現に、私は県庁でそういうことを言われた時に、爆発致しましてね、それで立ち上がって私はその課長を怒鳴りつけたんです。大きな声でね。それでとうとう破談になりまして、一文も手に入りません。やっぱり、ああいう時に、今の私ならにっこり笑ったかも知れないね。「うん。そういう見方もあるよ」と、言ってですね。原子力というものが今開発されてますが、私はその時は原子爆弾のように爆発してしまったんであります。けど、今なら平和利用致しまして、原子力を平和利用してブレーキを掛けかけ、長い間じわじわと戦いのエネルギーにこれを使ったことだろうと思う。歳とったからそういうことになったのかも知れない。その当時、私はまだ三十代だったから。今、五十代ですからまあそれだけこう、ずるくなったのか、円熟したのか、つまり原子力

の平和利用ということを考えるようになったのであります。

しかし、そうだといって、情熱を失ったわけではありませんから、いつ何時でもこれは爆発するぞよという姿勢は持っているのですが、ただし爆発したら決して得にはならんことだけは、承知しております。戦争はいけません。戦争でなく説得で。ベトナムのあるいは、エンタープライズの入港の場合もです。棍棒持ったり石投げたりしないで、血を流さないで、本当にその学生らしい弁論で、街の中、公会堂の中、学校の中、至るところに弁論と弁論とを持って、私は国民に訴えるべきものがあるはずだと思います。そういう方法があるはずだと思います。

静かに己を抑えて、本当に本当の自由というものを、我々のものにしていくためのプロセスを、私は尊重したいと思いますね。そういうものが国民に訴えるでしょ。我々はですね、憤激して火花を散らしている者を見て、ビックリは致しますけれども感動は致しません。人を驚かすことはできても感動させなきゃいけないです。腹の底から揺さぶりをかけていけるものでなければいけない。精薄対策もそうです。ただいたずらに憤激してだけいないで、一人から二人へ、またもう一人へですね、揺さぶりをかけて響きあっていくというような、その浸透の仕方をですね、説得をしていきながら、そして人間というものはどういうものだろうかということを一緒に、生活の中で深く考えるってことが大切ですね。

今の政治家がどちらを向いているかということを、私は悲しむことがしばしばありますけれども、しかし、そのためには、精神薄弱児に対する世論というものが、社会の世論というものが、もっと健全に形作られていくための努力を、私たちはどれだけしたんでしょうか。予算の時期に、十二月になって議会の議員さんたちのところにお百度踏んだり、あるいは大蔵省や厚生省の所を行ったり来たりして、毎日毎日のように徹夜で、お願いをして廻っているのが現状でございます。あるいは時には、こんな時期には、決起大会と言って大勢の人

たちや関係者が集まって、そして決起大会を東京の真ん中の会場を借りまして、例えば久保講堂とか、そういうところを借りてはやっております。

おとどしの決起大会の時にね、花森安治君を、『暮らしの手帖』の編集長である花森君に、ぜひ一つ国民代表としてね話をしてくれないかと、私が頼みに行ったことがあるんです。なぜかというと、あの人が、『暮らしの手帖』の中でね、ある一つの精神薄弱のための提案をしてくれたんですね。九月号だったと思います、おとどしの。その『暮らしの手帖』の提案と申しますのは、二回目だったようですけれども、全国のこれという有料道路がね、期限が切れたら無料になるでしょ。あの有料道路が、期限が切れてからさらにもう一年、有料道路のまま料金を徴収することを提案しておるんです。そして、そのお金を、一年間の有料道路を延長したそのお金を、精薄の幸せのために使ったらどうかということを提案しておりました。

ところが、そういう提案をしますというと、あの建設省とかね、道路公団とかのお偉いさん方がね、花森君に面会をしばしば申し入れてきたそうです。「全部、お断りして、俺は会ってないんだ」って言っていました。「どうして？」って聞いたらね、「会って、事情はかようかようだから、だからそういうことを規則があるので、やれないんだと言われてしまうと、今度またもう一遍提案したいと思うのができなくなってしまうじゃないか。変な話だけど、俺は提案がしたいのであって、提案さえすりゃあいいのであって、これが聞かれてしまうと、またできないという理由を承知してしまうと、提案ができなくなるから困るんだ。おかしなことだけれども、聞かれない方がええぐらいなんだ」と。妙なことを言うなと。ふと私は思いましたところが、「実はね、国民の茶の間にね、我々の提案が、何回も何回も届くことによってですね、茶の間で精神薄弱の問題を家庭の問題にし、展開してもらうということを期待するからなんだよ。何千万か何億かのお金が欲しくてやっているんじゃ無いんだよ」っていうことを花森君が言ってました。分かりますか、その意味が。社会の問題にしていくということが目的で提案をしてるのであって、提案することによって、聞かれて、お金が入ってくることが目的じゃあないんだということをね、彼は言ってるんです。

それで、そういうことを言っているもんですから、これは、我が方の味方だと思いましたので、皆と相談して、そして決起大会の時にね、お願いして、国民代表というので一人喋ってくれないかと。文部大臣だとか、厚生大臣だとかね、法務大臣だとかいろんな大臣やら代議士やらなんかが、わんさ、三尺ほど高い一メートルほど高い壇の上にずらーっと並んでですね。所狭しと並んでる。そして先程から、祝辞だの何だのというのが、次々に読まれているんです。それで、国民代表として彼が立ち上がって、「私はこういう種類の会合には、初めて出席したので、実に興味津々として、さっきから眺めていました」という皮切りの言葉からですね、えらいことを言いだしましてね。私はまあ頼んだものの、こら内心ヒヤヒヤしとったんですが、「ここらに、私の後ろのほうに並んでなさる大勢の人は、一体こんな所に並んでて何しようと思ってんだろう」って。そして、「こういう人たちに、あんた方が訴えなきゃならんというのは、何かちょっと変じゃないかと思うんだ」ということを言い出したんですよ。それに、「聞いていれば何とか次官というような偉い人が、大臣の次のような偉い人が、大臣が都合で来れないからと言って、そして大臣の祝辞を代読しますと。やってなさるけれども、一体そのね、人のね、祝辞だか激励とかいうようなものを代読するとは何事だ」って言うんです。「そんなそんな次官さんだとか、局長さんだとか偉い人ならば、私はこう思うと言ってなぜ、この生な声を自分で喋らないのか」って言って、そこに居るんです。その人がね。うん。ほんでただ、あの代議士の人は自分で自分のことを喋ったから、あれは山下春江さんだったかな。「山下さん、あんたは、及第だったね」なんて、もうめちゃくちゃやねもう。「で、まあしかし、今日のような時代だから、こういう人やお役所なんかに出かけて行って、そして、ある時は手を合わせ、ある時は、膝をついて皆さん方も頼まなきゃならない。この子らの幸せのために頼まなきゃならんというような羽目になってることは、私も想像できます。けれども、本質から言ったらこれは、方角違いですよって。こんな人に頼んだって駄目です」って言うんです。「そうじゃなくて、後ろ向きになって国民に向かいなさい」ということを言うんです。これが彼、国民代表としての言葉でした。

「国民は知りませんぞ」ということを言いました。誰も知りませんぞと、この現実を。「だから皆さん、関係

者がここで、このただ関係者だけが叫び声を上げているだけじゃなくて、向こう側を向いて、日本国民全体に向かって叫びなさい。教えてください。国民代表として、私はそれをお願いします」ということを彼は言いましたよ。これは非常に大切な問題でして、これから後、私たちが運動を、社会的に展開するといった場合のですね、まず方向というものをね、この予算決起大会なんかで示されるような方向とは違う意味を持っているということをですね、まず一つ認識しておく必要ありますね。これをよく考え、そして私たちも一人ひとりが国民の一人ですから、そういう意味でのその国民の一人としての考え方を持ちましょうね。それで、隣近所の人にでも、いわゆる地域社会の中に、この問題を展開していくための仕方を工夫していくことが大切だと思うんです。

一般論的なことを今申し上げたのでありますが、ちょっと休憩をして、そしてあの、五分ほど休憩をして、生理的にもね。休憩が必要だと思います。それからお茶なんか飲んだり喉を潤されたり。それじゃあ。

それでは引き続いて後のお話を、もう少し今度は具体的に教育とか指導とかいうことの内容に触れるような意味で、後半をお話してみたいと思います。

リハビリテーションということは、先ほどお話したので、大体分かって頂いたと思いますけれども。今度はあのそういう社会に復帰するというようなことが、身体障害者の方のように期待できないという人ね、もう一遍帰るというには、お腹に帰るしかないんだというような人たちが、重い障害を持っている精神障害や、または精神薄弱とか重症の心身障害の人たちの場合は、そういうことが言えますね。そういう人たちに対するリハビリテーションていうことは、どういうことだろうか。もうリハビリテーションというのは、もうそういう場合には、ちょっとあの、ふさわしい言葉でないようになってしまいましたね。ですから、本当は専門家の間では、ハビリテーションていうのがいいんじゃないかと言っているんです。「リ」を取っちゃう。もう一遍ということをやめ

てね。そうすると、ハビリテーションになるでしょ。ハビリテーションという言葉は、どういう意味があるかといいますと、むしろね、人間が人間としてのね、資格を獲得していくプロセスというふうに見たらいいと思うんです。人間が人間となっていく道行きだと考えたらいいわけね。人間が人間としての資格を獲得していくプロセスである。難しいな。だから、人間が人間となっていくということですね。人が人と生まれて人となるということなんです。そういうプロセスのことを、ハビリテーションとこう言ったらいいと思うんです。

だからそれは、リハビリテーションという場合は、そういうものは、もちろん土台にあって、そしてあの、職業的に、社会人としての、社会にもう一度帰っていくという、帰っていくような人間となっていくということが、リ・ハビリテーションだったのね。それを、「リ」というのを取りましょう。けれども、そういったハビリテーションというのも含めた意味で、リハビリテーションという言葉が、広く理解したらどうでしょうかというので、最近ではね、特別にそのハビリテーションとリハビリテーションとを分けて考えたりしないようにしております。これはまあ約束ですね。ですから、精神薄弱者、精神薄弱児の場合でも、リハビリテーションという言葉を使って、そして、その本来の意味であるところの、ハビリテーションということをその中身として考えていきましょう。そうすれば、どんな重症な心身障害を持っている方々でも、リハビリテーションということが言えるのではないかと。こんなふうに理解しようという約束になっておるわけなんです。分かりましたね。だから、ハビリテーションということが、ここで問題になるんですよ。

そうならば、ハビリテーションとは、一体何でしょうかということです。人間が人間と生まれて、そして人間となっていく。こんな分かりきった話はありませんから、説明をすることがかえって難しくなってしまうだけで、一番分かりやすい言葉ですね、ハビリテーションというのは。つまり、オギャーと生まれた赤ちゃんが、だんだん大きくなっていきます、ということなんですよ。そんなこと分かりきった話ね。説明しようがない。ただね、私たちは、じゃあどんなふうに大きくなっていくんでしょうか。そういう大きくなっていく道行きの中に、殊にハンディキャップを持ったような子どもさんたちが、お母さんとの共同生活の中で、また、だんだん大きくなっていって、兄弟衆や隣近所や、あるいはもっと大きくなっていって、学校の教育やね、場合によっては、保育所だとか幼稚園とかね、あるいは施設とか、そういうところの生活を通して、だんだん大きくなっていくんです。それは、ただ大きくなっていくとは言いますけれども、その中で、どんないわゆる教育や指導がなされていくかということを、私たちが問題にすることなんです。ですから、ハビリテーションというのは、人間が人間となっていく道行きではありますけれども、その道行きの中で、どんな教育や指導というものが、あるいは治療というようなものが、その中でどんなふうに位置付けられ、どんなふうな関係を持つようになってくるでしょうか。これが問題になってくるわけなんです。ですから、むしろハビリテーションというのはね、すべての人々に関係があるわけです。すべての人々がハビリテートしなければならない。

もっと言えば、生まれてからだんだんと大きくなっていくまでの、その発達が問題になってこなければなりませんね。発達。人間の子どもさんの発達ということをね。発達の面を、身体の方からは成長というふうに、あるいは、成熟していくというふうに見ますが、発達という言葉を使う時には「発達心理学」なんていう言葉があるようにね、その心理的な面の発達ということを、大変人間の子どもとしては考えさせられますね。

ですからほら、赤ちゃんコンクールなんかあるでしょ。満一歳になった時ね。これ目方だけでね、赤ちゃんコンクールで比較をしたりするというのは、これは豚の赤ちゃんのコンクールと一緒やないかって言ってね。そのお医者さんが言い出しまして、それで私たちのところでは、あの豚ではない人間の赤ちゃんだということを、この比較するのに、やっぱりその人間の赤ちゃんと豚の赤ちゃんとどう違うかという点を押さえんといかんなと。それは、顔形が違うというだけじゃなくて、もっと本質的にですね、この頭の働きというものが、どうかということを問題にしないといけない。いわゆる、メンタリティというものをね。メンタリティというものを問題にしたい。こういうことになったわけなんです。

ですから、三歳児健診なんかでもね、児童福祉法で三歳児健診が定まっているでしょ。あの三歳児健診の検査項目の中の、第九番目を見てご覧なさい。精神の発達を調べることということになっている。三歳児健診

だけじゃありません。赤ちゃんコンクールだってそうです。生まれた時から人間の赤ちゃんは、豚の赤ちゃんとは違うんです。やっぱり人間の赤ちゃん。そうならば、人間の赤ちゃんとしての発達をどんなふうに調べたらいいか、どんなふうにそれを育てていく、健全な発達ができるように育てたらいいか、これが保育の理論なんです。そうですね。保育というものは、健康な肉体とともに健康な精神の発達を願うわけなんですね。精神なんかどうでもいい。体さえ良けりゃあいいんだ、なんていうわけにはいかない。「健全なる身体には、健全なる精神が宿る」、なんて一方だけをバリバリやってますというと、何かこうおかしな、世界的に今問題になっているような赤ちゃん、子どもさんができていくんですよ。

世界的に問題になっているというのは何か。私、ドイツに行った時にね、ドイツ人でも非常に困ってる問題があるんだということを言ってました。それで、その問題というのは何かって言ったら、「身体だけがじゃんじゃん大きくなっちゃって、心が幼いのがいっぱい居るんだが、日本にはどうかね?」って聞くから、「いやあ、お互い様だよ」って私は言った。「日本にも、だいぶんそういうのが増えてね。身体だけ一人前になっているんだけれども、精神の発達がトンと伴ってないのが、この頃多くなってね」。何とかいうな、あれを「アク、アクセ、アクセラリゼーション」(編者注―糸賀は「アクセラリゼーション」と言っているが、「アクセラレーション」[acceleration]の誤りであろう)とかなんとか言うて、世界的に今問題になっていますね。で、ある人はそういうわけだからして、犯罪が起こりやすくなってきたんだ。青少年犯罪というのは、そういうアクセラリゼーションとか言うので、身体が大きくなって心が成熟しない人の場合に、この社会的な摩擦がね、あるいは、社会的なその関係が乱れてくるという、このまあ道徳的な意味ももちろん含めまして、そういうような問題が多発してくるようになるのは、そういったその、肉体と精神のアンバランスというものが中心になるんだというふうに説明をなさる人もあるわけです。

ところが、精神薄弱者の場合はまさに、肉体の発達とそれからまあ、発達と言いますか、この肉体、まあ特に発達と言いますと、肉体の発達と精神の発達とのアンバランスていうのは、これほど顕著なものはないわけ

ですわね。普通の平均から言えば、そのズレが問題になっているというのが、精神薄弱の特色だと言われてるわけですから。それでまあ、精神薄弱というような名前で呼ばれるわけです。

で、そのアンバランスをどんなふうに克服するかということなんですね。どんなふうにこのアンバランスをアンバランスとして、それがあの回復できるかどうかというところで、うまく回復できないという、このまあほとんど文部省の言葉で言いますというと、「恒久的に遅滞している」という言葉を使うわけですね。恒久的に。いつまでもという意味です。恒久的に知能が遅滞している。リタードしている。遅れている。知恵遅れである。ということです。恒久的に知恵遅れである。つまり、治らないということでしょ。で、治らないという、つまりアンバランスは治らないんだということが、その特色であるわけでしょ。そういう人たちの発達というものは、どんなふうに考えたらいいのでしょうか。ここに、精神薄弱児の特殊教育というものの難しさがあるわけです。

一生懸命で教えれば回復するっていうなら、こらまた教え甲斐もあると思う人が多いでしょう。ところが、知恵遅れは回復しないということになったら、いくら教えてもね、教えても教えても普通の人にはならないということが、もう宿命のように決まっているとしたら、ガッカリしてしまう人が多いかも知れませんね。先生の中にもね。特殊教育というのは、そのガッカリするような仕事と、取組む仕事を特殊教育というんです。

さあ、大変なことですねこれは。一体、そんなガッカリするような人間というのは、何だってこの世の中に生まれてきたんだろうと思って、疑問に思う人もあるかも知れません。そんなのは、普通でさえもないんだから、まあ本人も不幸だろうし、周囲の親兄弟も不幸だし、いっそのこと死んでくれないかしらなんて思うようになってしまいます。教えて、育てて、将来に希望があるならいいけども、いくら教えて育てても、一生涯これじゃあ張り合いが無いと親も思い、世間も思い、先生も思ってしまう。こういうのが、知恵遅れ、精神薄弱なんですね。

イディオ・サバンなんかと言ってですね、「ありゃあその馬鹿だけども、天才的なところがある。これが、めっけ物だ。精薄ってのは、何か探すとその中にいいところがあるんだよ」などと言ってですね、慰められる。一番代表が、あの山下清画伯なんかそうやないか。あの時代ね、親御さんたちがえらい鼻息が荒くなってね。そして、「うちの精薄だって言われるけれども、そら山下さんぐらいにはならんか知らんけど、なんぞいいところありまっしゃろ」言うてね。「そのいいとこってのが分からんっちゅうのは、先生がどだいその駄目だからだ」と、こうきたわけなんです。たまりませんね、先生の方は。ほいで、「発見できないというのは先生のせいであって、うちの子には、隠れた何かがあんねん」こういうわけですから。それだから、イディオ・サバンを礼賛すればするほど、親御さんたちは何か希望をそこにめっけようと考えられるんですね。無理もないです。本当に無理もないけれども、それで問題が解決するのだろうかということなんですね。これは、特殊教育に従事する方々、親御さん、また、施設の職員の方々が、必ずぶつかる大きな問題なんです。

そして、それさえも絶望だということになりますと、この死を選ぶということさえも現実にはあるのです。実際あるのです。「ＩＱが低いので殺した」というようなことがあるんですからね。将来を悲観して、わが子の将来を悲観して、ＩＱが低いから殺した。ベルギーのサリドマイド奇形児を産んだお母さんが、あのお手てが、その腕が無いんですね。こういうところからこう、エンゼルベイビーなんて言いまして、あるいは、アザラシベイビーなんて言いましたね。こういう子どもが、生まれたことを悲観して、お医者さんと相談をして、毒のジュースをこしらえて、その赤ちゃんを殺したでしょ。それが、ベルギーでは問題になりましたのは、皆さん覚えてますね。六、七年前の話。ところが、裁判所ではそれを無罪に致しました。ベルギーの法律では、無罪か、または死刑かです。人を殺した場合は。それですから、このお母さんを死刑にするか、それとも無罪にするかという、途中が無いわけです。「全てか、または無か」といったような具合になってるらしいの。それで陪審員制度ですから、陪審員の人たちが相談を致しました結果、無罪説になったんです。まあ、無理もなかったというふうに考えたんでしょうか。そういう奇形児が生まれたり、重症な障害者が生まれた場合には、これは殺されてもあるいは殺しても、まあ情状酌量をして事情やむを得ないものと認められたのが、これがベルギーの裁判であったわけです。

そこで、こういう判決というものが本当に妥当であると考えますか、それともそれはいけないと思いますか、というそのアンケートを日本でもイギリスでも、あの当時、世界中がこれを見守った事件でしたからね。それでアンケートを求めたんです。『ジュリスト』という日本の法律界の雑誌がございますが、その『ジュリスト』には、アンケートを法律学者が整理致しましたその結果が載っております。私は、それを見ました時に、日本の女子学生ね、東京でのね、女子の大学生辺りが、ほとんど女子学生だけのグループにアンケートを求めた調査とね。それから、一般のサラリーマンとか、ちょっと有識者、知識人、そういう人たち。お坊さんだとかね、あるいは学校の先生とか、会社の若いサラリーマンとか、そういったような人たちを対象にした調査とね、二つ出ていました。『ジュリスト』にね。不思議に二つともね、似たような結果になってるのを見て、私びっくりしたんです。ちょっと違う点は、女子学生のほうには、あの女の人らしい結果が伺えたように思いますけれども、まあ詳細なことを今ここに資料を持ちませんが、大体のことを申し上げますとね。あの判決は妥当である、あの判決は無理もない、死刑になるんじゃなくて無罪になったことは結構だと、賛成だと、いう考え方をしている人が七〇パーセント。女子学生の中で七〇パーセント。それで、事情はどうか知らんけれども、無罪というのはいかんという考え方、そういうのが三〇パーセントですね。これは、一般の方々の場合も同じような理屈でした。それからまたイギリスの世論調査でも、やはり同じぐらいでした。七〇パーセントと三〇パーセント。こんなもんでした。

ですからね、そういうような重症の障害を持っている子どもさんというのは、まあ殺された、殺した人が無罪になるのが妥当だという考え方の、底の方にはね、そういう人は、殺されてもやむを得なかったろうという考えが、根っこにあるわけでしょ。根っこにあるわけです。これが、日本の世論だと考えたらどうなります。そういう障害を持ってる人たちが殺されてもしょうがなかったろうな、という考え方。生きる資格が無いと考え

られたんだなと、こういうふうに見る見方というものが、半分どころか七割までが日本のね、しかも大学生などというインテリ層のね、大部分の人が七〇パーセントの人がそういうふうに思った。わずかに三〇パーセントの人が、殺さんでもよさそうなもんだと、こう思ったんでしょうね。

ですから、この皆成学園だとか近江学園だとか、さらに重症心身障害児を収容保護しているびわこ学園とかいうようなところはね、世間の人が「ご苦労さま」とは言ってますかも知れませんけれども、それはひょっとしたら上辺のことで、腹の底の方をのぞいて見ることができれば、「あんなことをして、無駄なこっちゃ」と思うてるかも知れない。あるいはひどいのになると、あんなことに金使うのは、浪費だと思っているかも知れない。もっとひどいのになると、三〇パーセントぐらいの人しかこの仕事を認めてくれていないかも知れない。日本中で。こういう現実の中に、私たちは立っているということを忘れてはいけませんということなんです。いくら、口先で何と言われようが、現実の社会というものは、こういう認識を持っているんだということなんであります。この仕事の中に一生懸命になっている人間は、世間の人がこれを認めないなんていうのは、けしからんなんて思ってますけれども、それから大抵の人が分かってくれてるはずなように思い込んでしまいやすいんですね。こういう仕事の中に埋没しているとね。

けれども、知りませんよ、世間の人ってのは。割合に近江学園なんか有名になっているのに、大津の町の中でさえも、「近江学園てなんじゃいえ」っちって言うてんのも居ますからね。私らは、関係者の間だけで近江学園は日本でも割合に有名だなんて言うて、いい気になってますけれども、町の人はそんなにも思ってない。新しい新聞記者なんか来ますと、近江学園とは身体障害の子どもが入ってるそうで、なんてやってますからね、もうてんでそのピントが、外れてしまっているんです。そういうような時代なんです。また、社会なんです。まあこれは、くどくどしく申し上げるまでもありません。そんなもんだと思ってください。そういうもんなんですから。

それにも関わらず、私たちは、この子どもたちの発達を保障したいと思うわけです。発達を保障しよう。それは、どういう人間観に基づくものかということ、どういう思想に基づくのであるかということ。これをしっかり弁えた上で、その中での生活と指導というものが確立してこないといけませんね。ぐらつきますわ、そうでないとね、やっている内に。七割からの人が、腹の底からは舌出してるかも知れんような仕事に従事してるんですからね。だから、ちょっとしんどい。しんどくなることあるんですよ。けれども私たちは、びくともしない。本当にその一隅を照らし続けることができる。それは、何によってでしょうか。ヒューマニズムによるものでしょうか。そうですね。ヒューマニズムですね、これは。確かにヒューマニズムというのは、一体どういうものなんでしょうか。ヒューマニズムの正体は、何でしょうか。そういうことを、この仕事を通して、私たちは考えさせられるわけなんですね。むしろ、ヒューマニズムをヒューマニズムたらしめるもっと根本があるんじゃないかという、その根本にまで私たちの考えを深めさせてくれる。深い性格というものが、ここで私たちに与えられます。それがあの、こういう仕事に従事している。体ごと従事している中から考えさせられることなんです。行動的思考なんです。行動をやめて、立ち止まって眺めている思想ではありませんね。そこに強みがあります。何と言っても強みがあります。

「社会主義社会を作ったならば、こういう子どもたちの社会的な不幸は無くなるはずである」などと言ってですね、そして「こういう仕事をやっているということは、この誤れる帝国主義的資本主義社会の体制を援護するだけのことである」などと言ってですね、こんな施設をやりゃあやるほど、資本主義社会はいい気になって、その欠陥を補ってもらって、甘い汁を吸うことになるだけで、新しい社会ってものは永久にできっこないというような理論を持つ人もありましょう。社会主義社会になった暁には、こういう資本主義の社会が産んだ凸凹野郎を、社会問題として露呈させることなく、社会主義社会は社会主義としての立派な解決法があるんであるから体制を変えなければならない。そのためには、現体制の権力者を打倒して、新しい指導体制というものを新しい体制として、社会主義社会の体制ってものを確立する。だから、現在の資本主義社会は倒

さねばならない。この考え方を、精神薄弱の施設の存在に対して批判として出された時に、私たちはどう言うたらいいのでしょうか。

私は、もちろん簡単に申し上げるわけにいかないと思いますけれども、多くの議論をそこで必要とする考え方を深めて、お互いにわかり合っていかなければならないと思いますけれども、こういう考え方の中で、私はその体制が変わらなければ駄目だ。今の仕事は、古い体制に援護射撃をするだけのことだということを言っている口の舌から、こういう子どもさんたちが産まれているという事実。新しい体制がくるまで、この人たちはどうしたらいいのですか。現に、今日も、昨日も、明日も、ハンディキャップを持った子どもさんたちは産まれているのです。この産まれている子どもさんたちをがっぷりと抱きしめて、親も施設も教育も、そしてその現実の中から、行動の中から、私たちはこの施設を例えば例にとれば、施設の行動実践の中から、問題を掘り下げ掘り下げて、新しい社会が建設されるための砦としての役割を果たしつつあるわけです。こういう考え方というものを行動的理論と私は言いたいと思うのであります。実践的理論ということを言いたいのであります。大学の研究室で、またはそういう子どもたちとの肌の触れ合い、「ミットレーベン」無しに、立ち止まって傍観者的にものを考えて済むことでは無いということをですね。それを、私は中心に置いて考えて参りたいというふうに思うわけなんです。

現在の体制に対して補完的役割をしているというならば、それは結構なんであります。しかし、単にこれを補うだけじゃなくして、それは一つの出発への拠点でもあるということを同時に合わせて考えて、そして実践を続けていくのです。それは立派な、正しい政策や施策が確立するように。それは、改良主義と言われても構いませんです。どんなに改良主義だと言われても、今日よりも明日、明日よりも明後日と、正しい施策や政策というものが、この子どもたちの幸せの方向において、築かれていくための努力を社会全体の人と一緒になってやると。一緒になってやる中核には、「ミットレーベン」がそこにあるということ。この「ミットレーベン」を中核にしながら、この子どもたちの世話をしながら、そして現実を切り拓いていくという新しい未来を切り

拓いていくというような働き、ここに本当の意味の国民大衆と共に、そこにソーシャル・アクションが起こってくるという理解の仕方を、私たちは持つべきでないかと思うのです。

だから尻を拭いて、尻を拭くというような、鼻をズルズルの鼻をかんでやるというような、手にその感触がいつまでも残るような「ミットレーベン」の中で、初めて発言ができるというような発言もですね、私たちは尊重しなければなりません。それは、一隅を照らしているからであります。そんなことは、天下国家に関係が無いと人は言うかも知れません。言われてもいいです。言われたって構わない。しかし、必ずこの一隅を照らすところから、この子らが世の光となってくるのです。この世の光となってくるこの光というものが、この子らの存在そのものが、光輝いていくような、そういう育てというもの、教育というもの、指導というものが、社会の財産になる。専門職というのは、そういう働きをして下さる方々なんです。もちろん、安い月給です。もちろん休みもろくすっぽ無い。大変な仕事です、現在は。従って、そういう大変な仕事を客観的な労働条件として立派なものにしていくために、園長さんはじめ、学校の校長先生も職員も組合もですね、みんなが一生懸命で、これを客観的な条件を改革していくための戦いをやっているわけなんです。

しかし、数が増えれば、月給が上がれば、問題は解決するでしょうか。客観的条件を整備するという努力と共にです、主観的条件を整備していかなければならないのであります。この主観的条件とは何でしょうか。それは、私たちがどんな考え方をね、この自分自身というものに対して持っているかということです。これが、非常に大切な、私は中心的な、一方では課題となってくる。決して客観的条件の整備だけで、全てが解決するものであるとは考えられない。と言うて、主観的条件さえ整備され、突っ込んで行かれればそれでいいなんていうことも考えられない。この両方がですね、本当にこの非常な苦しい現実の中で含まれていくということが、大切なのではないかというふうに考えております。これは、私の私見の一端を申し述べさせて頂いたわけであります。

そこで、こういうような一隅を照らす仕事の中身、つまり発達を保障していくという作業。指導の中身でありますけれども、それは、私は幾つか述べることが、もうきりがないほど大変な問題であって、何十時間でも共々に研究しなければならないことだと思うのでありますけれども。こういう施設などで、あるいは学校というような集団の中で、一人ひとりの子どもがその光となるということは言い換えますと、自己実現ということです。主体性の確立と言ってもいいでしょうか。いつでもね、精神薄弱の人たちは、外から働きかけられてばっかしいる子どもたちです。多くの場合に。そうでしょ。この働きかけられている人たちが、自ら外に対して、働きかけていく人にならなければなりませんね。主体性の確立という言葉はよく使われますけれども、それは今のように働きかけられつつ、それを受け入れつつ、外の世界を変えていく人のことを主体性の確立というのです。そういうことですね。

皆さんもそうでしょ。人から貰うだけでは、ちょっと具合が悪いでしょうが。やっぱり、プレゼントもせんとね。何か気持ちが収まらないでしょ。プレゼントをすることによって、貰ったり与えたりすること。また、与える喜びというふうなものも大切でしょ。貰う喜びは、何よりも結構。なんちゃなだけでですね。取り込み主義で、貰ってばっかしおる人というのは、「あの人ケチよ」なんて言われちゃうんだね、いつの間にかね。そうじゃなくてやっぱり、自分からも働きかけていく、外に向かってね、それで外に向かって働きかけるということは、外を変えていくことですね。自分も変わり、外も変わることなんです。面白い現象がそこに起こるんです。それを教育というんです。教育というのは、働きかけられて働き返すこと。こういう構造を持っているんですよ。教育というのはね。

精神薄弱児の教育というのは、かわいそうな子どもだから、何でもかんでもたくさんこの条件を整備してやって、何でもかんでもたくさん与えれば、それで子どもたちが満足するかというと、満足はするかも知れませんが伸びません。そんなことでは。だから、普通学級の中にぽつんと一人、精薄の子どもが入れられて、そしてみんながかわいがっている。先生もかわいがっているし、それから他の学友たちも四〇人のクラスに一人の精薄児が居て、三九人がみんなこれをまるでペットのようにかわいがっている。その先生は、「うちのクラスは、もう本当に和気藹藹としてね、精薄の子も居ますけれども、これこそまさに天国のような、実に楽しい学級です」と。こうおっしゃったとします。果たして、そのような条件というものが、そのたった一人の精神薄弱児にとってプラスでしょうか。どう思いますか。かわいがられた存在。問題の無い存在。これがプラスであるとは言えませんぞ。大変な問題な存在ですぞ。そういう形の中では、子どもたちは、その人に愛情を注ぐでしょうけれども、注がれた人はただいつまでもいつまでも受身だけの存在になってしまいますぞ。働き返すことができない。そこに特殊学級というものの、とてもとても大切な存在理由があるわけですね。

しかし、特殊学級でも、あるいは施設の生活グループでも、いつまでも同じグループの中にだけ、朝も昼も晩も居ていいでしょうか。クラスの王国というようなものがそこに築かれたとします。特殊学級のベテランの先生が居なさって、あの学級は大したもんだ。子どもは、先生の手足のごとく動いてなさる。あの施設のあの先生は、ベテランの指導者であって、あるいはベテランの保母さんであって、あのクラスは抜群だと。他と比べて見てなんとまあ素晴らしいクラスだろう。あの先生の性格がそっくりクラスに反映してますね。などと言われるような単一グループがですね、朝も昼も晩も夜中も、また朝も昼も晩もそれで続いていって、素晴らしい成績を上げたとしましょう。一体そういう成績は、本当の、子どもたちにとってプラスになる成績なんでしょうか。これ、考えてみなきゃなりませんね。

近江学園は、最初の頃は、そういう成績を上げることに一生懸命になって、何年も何年も経ちました。そして、ある時これは間違いではあるまいかということを感じました。なぜ間違いかと感じたかといいますと、人間というのは、いろんな面で人と触れ合わなければいけないのに、いつも同じ関係の中に置かれてばっかし居るということは、偏ったパーソナリティを形作ってしまうんではないか。上下左右の人間関係というものが、いつも同じである。そのいつも同じであるということは、とうとうマンネリズムになってしまいまして、いわゆる名前をご存知だと思いますが、「ホスピタリズム」(hospitalism)というやつです。施設病だね。ホスピタリズム。ホスピタルというのは、病院という意味ですね。英語で病院という意味ですが、あのホスピタリズムと

いうのは、施設病と訳されています。日本語になっています。あの施設病になってしまった。施設病っていうのはどういう病かというと、人格的な働きが非常に低下してしまうわけですね。いわゆるマンネリズムの中に沈没してしまうわけなんですね。しまいにはですね、身体の働きまで鈍ってしまいましてね、赤ちゃんなんかがホスピタリズムにかかってしまうと、何か人間的接触関係が希薄になってまいりますと、しまいにはその身体構造から人格的な生き生きとしたものが失われてしまうわけですね。

よくあのたくさんの子どもと一緒にね、乳児院で育った子どもがやがてまた、たくさんの子どもと一緒に幼児院で育ってね、それから近江学園に来た。そういう子どもさんを見ましてね。乳児院と幼児院との間にね、肌と肌のふれあいってものが十分でなくて、いわゆるマンネリズムでほったらかされていたその子どもさんがね、ちょうど大切な赤ちゃん時代から少年時代の初め頃を経過して、満六歳になって近江学園にやって来た時の姿を見ますとね、何とも言えない悲しい格好をしていますね。同じ六歳でも、家庭で腕白したり、障子破ったりガラス割ったり。それから喧嘩したり、引っ掻き回したりして叱られたり、どつかれたりして育ってきた子どもと比べますとですね、何か影が薄いの。廊下を歩く時でもね、大きな足音させないで、さらさらさらと歩ってんの。何かこう気味が悪いみたいだなあって。あんまり大きな声でも、ものを言わない。そしていつでもこう、ぽつんとしています。みんなとの間に生き生きした、こうジグザグの人間関係ってものが形成されない。一方交通みたいなもんですね。何か非常に寂しいものを感じさせます。

そこに私は、スキンシップというようなことをボウルビィも言っておりましたけれども、いわゆるそのスキンシップ。肌と肌との触れ合いというようなものの、欠乏もあったのかも知れませんと思います。けれども単にスキンシップだけじゃなくて、余りにもたくさんのマンネリ化した生活条件の中で、すっかり萎靡沈滞してしまったんだということを感じます。そういうのをホスピタリズムと言いますね。

ところが、何も赤ちゃんや子どもさんだけのこっちゃなくて、施設などに永年勤めています内に、大人のほうもホスピタリズムにだんだんとなって参りまして、何か施設病的な顔をしていると。こんなふうになる。大

人のホスピタリズム。これは、誠に警戒すべきでありまして、伝染性疾患でありますから。これはですね。ついに施設全体のホスピタリズムにかかってしまった。これは、赤痢なんかよりももっと強烈なる、伝染力を持っております。そして先生のホスピタリズムは、たちまちに子どもに伝播いたします。先生だけでは済まない。こういったような、ホスピタリズムというものは、どうして防いだら、予防したらいいのでしょうか。

これこそまさに、大変な問題でありますが、それはたくさんの人々との異質的な人々との接触ということが大切なのであります。一つのグループだけが、円満に運営されてるからといって、それで満足すべきもので無いということを私は強調したいのであります。

ですから、現在近江学園の中で、手前味噌なことを申し上げるようですけれども、恐らく皆成学園さんはそういうことは、とっくの昔におやりになっているようでありますが、私たちが気がついて始めたことは、どういうことかと言いますと、一つの生活グループの拠点があります。Aという拠点があります。これがAという、生活の一片がある。こん中には何人かの子どもたちが生活を共にしていますね。ところがBというBグループというものに、そのAから移ってくる。この場合は、AのまたAダッシュ、A2ダッシュ辺りから、適当にこう入っていきます。で、Bというグループが、学習グループとして形成されていきます。これは、発達的には等質な発達をしている。質が、発達の、発達の面から言えば、発達的には等しい質を生む。等質グループである。それから今度はですね、さらにCというグループが一つできる。このCのグループは、どういうグループかというと、歳もそれから発達もですね、精神発達のことね。そういうものもいろいろとミックスされているような、生産グループ。生産の。これにはまたAやB、AダッシュやA2ダッシュやA3ダッシュから入ってくるわけです。BとCとはグループが違います。Aとも違います。子どもたちは、一日の間に必ず少なくとも三つのグループには属しなければならない。こういうことになります。

ですから、Aのグループで一番トップで威張ってた子どもが、Bのグループに行ったら途端に一番ビリっ子で、ぺしゃんこにみんなに付いていくために努力していますが、Cのところに行ったら、ちょうど中位なところに入っちゃったと、こういうような人間関係が形成されていくわけです。その他、「この指に集まれー」という任意グループというものもできるでしょ。野球のグループだとかね。あるいは、ちーとそこいら散歩に行こうじゃないかっていうグループね。あるいは、ケンケンをして遊ぶグループね。遊びのいろいろなグループてものは、これは任意集団として。これらは権威集団ですね。この学園の組織、体系の中に位置付けられたグループですね。その他に任意グループが、いろいろこのあるわけです。XYZというふうにいろいろな任意グループができてるわけです。

夏になると、魚釣りグループなんかできてくるわけですね。バケツ持って瀬田川に魚釣りでなくて魚すくいに行くようになるんですが。イディオ・サバンみたいな話ですけども、バケツやがて持ってくる時には、魚いっぱいバケツに入れる。釣り道具ひとつ持たないで、瀬田川に行って魚をつかんでくるわけなんです。それでそこいらでこう糸を垂れて釣っている人が、口を空けてポカーンとしてるんです。阿呆らしゅうなってしまわれるです。網も無ければ、釣り竿も無いのですからね。それで、ジョボジョボっと入って行って、バケツ持って行ってフゥーっと片っぱしから、こうちょいと。魚のほうがスーっとやってくるらしい。そういうその天才のようなね、人がいますよ。子どもの中には。どういうわけか分かりませんね。これはもう現代科学をもってしても、解明することのできないようなね、非常に珍しいケースがありますね。

こういうような任意のグループというもののほかに、権威集団としては、今言ったような少なくとも三つのグループに属するということ。これは、ホスピタリズムを防止いたしましょう。少なくとも予防的な働きをするかもしれませんね。こういったようなことも、ひとつの考え方です。

それからグループというものは、集団指導というので、近頃は大変高い評価が与えられておりますけども、どんな集団指導と言えども、その集団全体が向上発展するということが期待されるだけでいいかと言えば、そうじゃなくて。集団指導というのは、集団の指導を通して、個人の人格的発達を考えていくのが、集団指導でしょ。グループワークというのは、遊びの中を通して個人個人の人への関係付けとか、あるいは、つまり協調性とか、あるいは自己の、自分の意思というものを相手に伝えることのできるような訓練が、遊びを通じてなされることをグループワークと、こういう訳でしょ。あるいは、そのグループワークというのは、そういった本来の意味から外れて、任意集団ではなくて、権威集団の中においてもグループワークが、あるいはグループダイナミックスが、ここで大変大切になってまいりますね。そうでしょう。それはどういうことかというと、集団指導だからと言って、集団が全体主義的に右向け右。「はい、右向きました」ていうもんじゃなくて、その中において、個々のパーソナリティが、どんなふうに集団を媒介として育つかということが目的でしょ。これは民主主義のルールですよ、これはね。ですから、その集団の中における指導というものを、いろいろな角度から研究が今日はされるようになってきております。

私は、リトミックなんかその一つとして面白いなというので、取り上げて今、検討しておりますね。リトミック。音楽に合わせて体操のようなことをしながら、集団的体操、集団的な動きを通じて一人ひとりが他の人と共同していけるようなね、姿ができてきます。

人間は誰でも、ひとつの基本的な基調、トーンを持ってます。そのトーンとトーンが違いますね。Aの人とBの人とは違うんです。私と家内でも違います。長い間はもう三〇年から一緒に暮してますけれども、とてもとても持って生まれた、その頑固な個性ってやつは、一緒にはなりませんね。何年経って死ぬまで、これは赤の他人だろうと私は思ってます。一心同体なんてことをよく言いますけれども、そういうわけにいくもんじゃない。けれども、私という生まれながらのこの頑固な個性と、わが家内というその頑固なる、これは房という名前ですが。房というその個性というものが、まぁ妙なところで一緒になりましたが。それからというものはですね、私が彼女と付き合うことにより、彼女が私と付き合うことによって、二つのね、核があって、その核融合というやつがだんだん成し遂げられてく。二つの核があるけれども、そうして今までは別々に円を、円を描いておったけれども、核を中心にね。それが一緒になることによって、その円形の、円の縁がね、お互いに溶けてきた。そして核は核であるけれども、楕円形にだんだんなってきておるんです。今ね、楕円形に。そして、こう二つをめぐ

る楕円がずーっとこうできている。元の円に帰りたい気持ちも、時々はその起らんわけでもないが、もう今となっては致しかたないというような形でですね。このトーンは、楕円の奏でるトーンは、最初の円が奏でていたトーンがあったのと比べると、違うトーンになっている。この楕円の奏でるトーンがね。音楽的な言葉を使ってね。そういうことです。子どもたちのパーソナリティもですね、この楕円を形成していくということなんです。先生との間に楕円形ができてきます。子ども同士の間に楕円ができていく。この集団指導というものを通して、一人ひとりの個性は確立していかなければならないけれども、その個性というものが、共同的なものが形成できるような個性に育っていくということなんです。大事なことですね、とても大事なこと。新しい芽が出るわけですね。新しい芽が出てくるわけです。

ですから、リトミックなんかやりますと、外れていきます。誰かは必ず外れます。その外れた子が、どうしたらそのみんなのグループの動きの中に入るかっていうことは、その子ども自身がとてつもない大変な勉強をすることによって、自己を変革することによって初めて集団の中に入っていけるのでありますから、また集団自身もそういう人を受け入れることによって、集団全体としてのまた性格が変わっていくわけなんですね。こういうね、相互作用。相互主体性の確立。あのフランスの文化省のマルセル（編者注―仏の哲学者）じゃありませんが、相互主体性の確立という哲学を彼は持ってますね。私が今、言おうとしているようなことを、彼のほうが、ちーと先に言ったのかも知れませんが、どっちが先か知らんけれども。相互主体性なんてことを言う。楕円形のことですが。要するにね。相互主体性、二つの主体がお互いがですね、本当に共同戦線が張れるような形の主体性。しかも主体性を崩していないという形。こういう関係をマルセルさんあたりは、おっしゃったのかも知れないと思いますけれども、私たちの特殊教育、精神薄弱の子の教育の中身もですね、そういった意味でリトミックなんていうものを中心に、まぁこれは一つの技術的な展開ですけれども、これも可能ですね。それから、自治的な活動というようなものも、この集団生活の中で勉強させられるわけですね。

まぁ、具体的な話は、いろいろあるかも知れませんが、もう二時、だいぶ過ぎてしまいましたが。さらに私は、渦というようなことも大切な考え方だと思います。渦作り、渦。あの鳴門の渦のようなね、渦を作っていく。この渦が指導の現場の中に形成されますとね、そうすると占めたもんですね。渦の中に入ってきますから。そうすると同化していきますね。こういうようなことも、一つの指導技術の中身だと思います。

最後に、問題を一つだけ提起したいと思います。

それは、今度私が…だいぶん熱くなってきたようですね…問題を提起したいと思いますことは、今度、びわこ学園なんかを舞台にしまして、そして「夜明け前の子どもたち」という映画を今作っておりますが、今度五月の四日に東京で、国立教育会館の大ホールで、最初のデビューをしたいと思っております。大阪の年金、今度できる年金会館では、五月の十一日にやろうと思っています。いずれも朝日新聞厚生文化事業団が主催のチャリティーショーをもって、かわきりに致したいと思っております。是非、皆さんもそのうちに山陰で、どっかでやりますから、その時にはひとつ是非見てやって下さい。見るだけじゃなくて、一人でもたくさんの人に見てもらいたいので、切符を売って下さい。そうするとリベートのあるようにいたしますから。そうして、一人でもたくさんの人に見てもらいたい。

なぜ、私が「夜明け前の子どもたち」という名前を付けたのでしょうか。「二〇世紀は児童の世紀」だと言ったのは誰でしょうか。エレン・ケイでしたね。エレン・ケイは、「二〇世紀は児童の世紀」だと言って、まさに児童の世紀である実態が示されてまいりました。一九〇〇年代になってから「児童の権利宣言」が宣言されましたしね。昭和の御世になってから後、特に終戦後におきましては、私たちのこの身辺に精神薄弱の問題が取り上げられまして、今まで捨てられていたような精神薄弱児の子どもとしての権利が、確認されようとしております。児童福祉法の中に、精神薄弱児という言葉が初めて昭和二三年に登場したんです。そうでしょう。私たちは、その仕事を今、二〇何年間続けてきております。

そして益々、「二〇世紀は児童の世紀」であるが、児童たちの中で一番恵まれなかった、この精神薄弱の子ど

もたちを、世紀の光に当てたいと考えてまいりました。そうしてすでに、二〇世紀は三分の二が過ぎてしまいました。もう残るところは、三分の一しか無いのです。児童の世紀だと言いながらですね。しかし、あと二〇世紀の残された三分の一で、果たして私たちは精神薄弱や重症の心身障害児たちが、まさに児童の世紀に生きてきたということが言えるような生き方を、ここに確立することができるでしょうか。二〇世紀のあと半分というものではなくて、三分の一としか残っていない。皆さん方は恐らく二一世紀にこれから差しかかる準備をしていらっしゃるだろうと思いますが、我々は二〇世紀のあと三分の一が、ちょいと自信が、心臓の具合などを考えますとありませんけれども。

しかしながらですね、しかしながら、この二〇世紀の間に重症な子どもたちの、本当の教育、本当の生きがい。生まれてきた甲斐、こういうものを確立してみたいと思うんです。にもかかわらず、三分の二を過ぎた今日でもなお、この現実はですね夜明け前であるという意味で、「夜明け前の子どもたち」という名前を付けたんです。残念な名前なんだ、これは。実に残念な名前。「夜明けに躍動する子どもたち」なんていう名前が付けたいところなんです。しかし、夜明け前の闇の中にまだ置かれている子どもたちがいるのです。これは、精薄の子どもたちであり、また重い障害を持っている子どもたちなんです。

ですから、この子どもたちの実態を、また実態というよりも、取り組んでいく実態を私は問題にしたかったわけです。療育ということの中身を、問題にしたかったんです。もっと言えば、教育とはなんだということを問題にしたかったんです。ですから、命ある、この命というものが、人間の命というすべての命の、どんな障害を持っていても、光り輝く存在にまで自己主張をしていくものだと。そしていかせるべきものだと。また当然それがしていくべきものなんだ、ということを実践の中で訴えたいというふうに思いました。

そうなもんですから、そういう題を付けたのでありますが、同時にその映画は、実は今日までに一年近い歳月、まぁ半年はしっかり過ぎてしまいましたが、クランクを回し始めたのが四月でございましたか。ですから、もう三月に完成いたしますから、丸々一年かかるんですが、その間に三五ミリの白黒ですけれども、それをですね、回し

まわして実に時間にすると、三〇時間分のフィルムを今は回してしまいました。音のほうはねぇ、いろいろな音をね、二〇〇時間分のテープを取ってしまいました。そうして製作費がね、とうとう最初五〇〇万円ほどでやろうと思っておりましたところが、どうにもやめられませんので、今のようなわけで、どんどんどんどんクランクを回していきまして、とうとう二八〇万円かかることになりました。それでこないだは、NHKの人たちも、「先生、大丈夫ですか?」といって心配してくれますやら、新聞社なんかも皆さんが心配してくださいまして、そして応援しましょうと言ってくださっております。この映画は、朝日新聞とNHKとが、後援という形で、しかし、まぁお金をいただく後援ではなくて声援を送るという、その後援でございますけれども。お金のほうは一口二〇〇円ずつ、えらい話になりましたが、二〇〇円一口で一〇万人の人を日本人から募集したいと思いまして、今、私の責任のもとに資金カンパを全国に呼び掛けております。どんどん今、集まってくださっておりますけれども、まだまだとても、まだ一割ぐらいしか集まっていないと思いますが、それでもまぁ、必死になって今やっております。

この映画は、重症な子どもたちをまず舞台に登場してもらいます。その、私がラッシュ(編者注―編集前の映像)というのを何回も見せてもらいましたけれども、もうナレーションも何にもない、ただ回っているだけの子どもの実態を、そして先生が取り組んでいる姿を見ますとね、もうグングンきますね。もう我々が肉眼でしっかり見ているつもりだったのに、肉眼なんていかにあてにならないかってことが、はっきり分かりますね。それはね、私は暗い映画になるんじゃないかと思ったんです。非常に暗いものになりゃせんかと思ったんです。なあに見てみますとね、明るいんですよ。ものすごく明るいですね。そうしてね、もう言葉は無いんです。言葉は何も無いけども、無限の雄弁な発言をしています。表情で、体全体で。明るくて、しかも能弁である。そうして子どもたちがね、輝いた明るいというよりも、むしろ輝いた表情をしています。カメラが捕えた顔ちゅうのをね。

ですから、それを見ますときに私たちは、自分の肉眼というものが、そういうわけで本当に頼りないもんだということを感じますのと同時に、この映画によってですね、重症な障害を持っている人たちの重症をということはもちろんですけれども、これを見ている、世話をしている我々の目のほうも、また重症やないかなってい

うふうに、思いましたね。この勉強、この反省、これが私は大切だと思います。

しばらくの時間を、この映画を、無声映画を見ていて、それで外に出ますとね、戦争と平和の、あの大きな映画を見たあとみたいに、ズシーンと何かものすごく大きなものを飲み込んだようなね、感じがしました。これが何にも編集してないものを見てそうですからね、今度三〇時間分の中から八時間に圧縮し、四時間に圧縮し、最後には二時間にして、二時間ものにして今度、出しますけれどもね。そして、音とナレーションとを入れますから、そして何も劇はありません。もう、完全なドキュメンタリーでやります。ですから是非ご覧下さい。そして、その中から何物かをつかんで下さい。それは私たちに非常にたくさんの大きなね、基本的な技術を与えてくれます。技術を。

その技術は、子どもたちとの「ミットレーベン」から生まれてきます。頭の中だけから、空念仏からは生まれてまいりません。「ミットレーベン」の中から無限に技術が湧いてきます。そして新しい技術は、次の生活を保障します。次の生活は、また新しい技術を生んできます。このクリエイション。この創造、創造的作業、創造活動っていうものが、教育なんであります。教育ていうのは、古めかしい教科書の中に閉じ込められているようなものでは決してないということです。精神薄弱や重症な子どもさんたちとの毎日の触れ合いの中に、実に素晴らしい人生にとってかけがえのない生きる喜びと技術が、その中に隠されているということ。

私たちは、「レディ・メイド」(ready made)な生活で無くて、本当にクリエイティブな創造的な生活というものが、生きがいだと考えております。どんなレディ・メイドな生活の中にも、時々は、こういうようなものを着るんですね。倉敷レイヨンの洋服ばっかし、私は着てない。時々はこういう、私の娘がこしらえてくれた洋服なんです。これがね。これは私の娘が織ってくれたネクタイ。私の娘が一本一本の毛糸をこしらえて、そして機織り機械にかけて、手織りの布地を作ってくれたのでこしらえた洋服です。娘がこしらえてくれたマフラーです。このシャツ以外は、全部娘の、私は喜びを身にまとっております。それはですね、手作り。手で作ったんです。クリエイションですよ。本当のね、人間の手あかの染みたもの。精薄の子どもたちは、こういうことをさせたら、生き生きとしますよ、

きっとね。そうして世の中がね、上に上に上にと伸びていくときに精薄の子どもたちは、横に横に横に根を張って生きていきますよ。これが本当の発達。上に上に上に根が枯れてしまうような上がり方でなくて、根を張ってズッシリと横に横に豊かな発達。こういうものをですね、私たちの生活の中に確立していくということを、特殊教育と世間は呼んでいる。また我々も、精薄と呼んでいますけれども、精薄と呼ばれている子どもがいるだけのこと。重症心身障害児というのは、言葉や歩くことの前で、つまづいている子どもたちのことを言うのです。そんなレッテルを貼って、問題が解決してしまうのではないですね。分かるでしょ、それは。レッテルを貼っちゃいけません。我々の仕事はレッテルを引っぱがす仕事が、我々の仕事なんだからね。世間と一緒にぺたぺた額に、これは精薄でございますなんてレッテルを貼っていくような仕事をしちゃいけないね。私たちも、あの子たちもみんな一緒です。

あんた方も生まれた時には、重症心身障害児だったんやからね。目も見えず、耳も聞こえず、立つことも這うこともできないでね。ただバタバタしてたんです。この重症心身障害児がですね、だんだん大きいなって、今こういうふうになったというのを独りでなったような顔をしてるけども、そうじゃないんです。そこで、今、私たちが言っている重症心身障害児たちも、かつては私たちが通ったのと同じ道を今通ってきょうるんです。それだけです。同じなんです。この我々の発達が、今日まで親や、社会や、多くの先輩たちによって保障されたように、この人たちの生活も、その発達も保障していきましょうよ。これが教育というものであり、これが施設というものであり、先輩というものの在り方なんですね。

そしてそれが、政治でも行政でも、当たり前のことにしなければいけませんね。総理大臣の鶴の一声であっち向いたりこっち向いたりするようなことの無いように、当たり前のこととしてね、社会福祉に金ができ、社会福祉の考え方が広がっていく。こういうことに私たちのこれからの実践を通しての努力が、あるいはその努力の目標が定められることだというふうに思います。

とうとう二二時半を過ぎてしまいました。一応、それじゃあこのくらいで、私からのお話は終わらせていただきます。

講義終了後、質疑の時間が設けられており、質疑への応答もテープには残されている。会場の質問者にマイクは向けられていないため、質問内容を聞き取ることは困難ではあるが、糸賀が答えた内容については講義と同様に明瞭に録音されている。以下は、質疑に対する糸賀の回答である。

（会場から質問が出るまでの間）

私は、同じことばっかし言って回ってるんですよ。新しいことがどうもまだ発見できないので、古い同じことばっかし。だから私の話を聞いてる人は、あぁ、またかと思う人もあるかも知れないと思うんですが。

私はある時に、ある会社の宣伝をやっている人の話を聞いたことがありましてね。そして、その人がね、宣伝をやるっていうのは、ＰＲをやるっていうのは、会社の運命を決定するぐらい大切なんだとね。ところがＰＲをやっている者にとっては、毎日毎日同じことをばっかしね、ひと粒三〇〇メートルなんてこんな格好をしてですね、そうして広告ばっかししてるっちゅんですね。それでこんなもん嫌になっちまってね、もうこんなことで人生が終わるのはもうまっぴらごめんだと思って、もう嫌。やってる人が嫌になってしまうぐらいの時に、初めて宣伝というものが、その辺から効果が出てくるんだそうです。

それを聞いてね、よーっしゃと思って、私は嫌になるまでやったろうと思って。同じこと、ひと粒三〇〇メートルでいいと。同じことをやってやってやりぬいてね、嫌になってしもうたら、その辺から効果が出るかもしれんぞと思って。商売でも、そんなことを哲学を心得てやっとるんですからね。私らも、負けちゃならんと思ってね。

（司会者から、タバコを吸うのを止めた糸賀に対して、どのように止めたかを尋ねる質問）

痛いところを突かれました。もう私は、もう何べんもタバコを止めよう止めよう思うたことがございましてね。自分の持っている大切なパイプや、キセルやいろんなケースやライターや惜しげもなく、これがあるからいかんのだと思って、人にやってね、そして決心をいたしますけれども、また買うてしまいますんです。それで、またその止めると宣言したことが何度あるか知れません。しかし止めるということが、必ずしもそのなんか

理屈を付けて、また吸い始めるんですね。実は一六の歳から私は吸い始めたもんですから、中学六年だけどね。そしてきついタバコを一日に二箱ぐらいから、だんだん三箱ぐらいまでになって、しまいには五〇本入りのピースの缶カンあるでしょ。あんなのが一日あったりなかったりするぐらいなところまで吸うてましたんです。もうまさに経済は大変な膨張です。タバコ代で。そういうことだったんですが、しかし一〇年ほど前にポツンと止めてしまいましたんです。それから、今、一服も吸いませんがね。本当にフッと止めたというのはね、今日一日止めようと思ったんです。明日から、もう煙が出るほど吸うたろうと思ったんです。今日、明日の代わり一日だけ止めようと。明日もまた今日一日だけ止めよう。

明日に希望を常につなげる。それだけのことです。

（会場から、精神薄弱というレッテルについて、どのように下ろしていくべきかを問う質問）

大変いいご質問をいただきましたね。そのことを申し上げ損なっていたなと思っていたところでしたが、どの程度というところが難しいところなんですがね。精薄ということが一番問題になるのはね、学校教育の中でも義務教育なんかね、学校教育の中で問題になるのですね。

学校教育というのは、知能が非常に偏重されるというと語弊がありますけども、知能が中心になりますでしょ。例えば五点評価でもって、五点というのは学業成績ですわねあれはね。学校の成績というものは知能が関係するでしょ。それですから、学校教育の評点、採点のああいう制度の中では、精薄は目立つんですわ。ものすごく目立つんです。勉強の方ですからね。読み書き算数なんてのは、これは不得手ですわ。精薄の子どもは。それは、知能の発達が遅れておりますからね。

それですから、そういう子どもさんのことを、日本だけじゃありませんのは、諸外国で例えばイギリスなんかでも「メンタル・リタード」(mental retard)、遅れということ言っています。遅滞していると言いますね。それからさらに、「メンタル・ハンディキャップ」(mental handicap)と言ったりね。または、「メンタル・デフィシェンシー」(mental deficiency)と言う、障害を持っている。メンタルな「デフィシット」(deficit)を持ってる、欠陥を持っている。こういうふうにまぁ言うとります。そういうような、欠陥とか障害とかあるいは遅れとかハンディキャップというのは、学校教育という仕組みの中で非常にはっきり表れますし、子どもの時代には機能の発達がかなりのスピードで上がる時期ですね。学校前でもね。その時期には遅れということが問題になるんです。それで知能検査なんかをビネーが、フランスでちょうど今世紀に入ってから五年ぐらいたったところですね、一九〇五年ぐらいにビネーという人がフランス人ですけれども、シモンの協力を得てビネー・シモンの知能検査法というのをやりまして、普通の子どもの集団の中に、どのくらい知能の発達が遅れている人がいるかそれを調べだすための科学的な方法というのを考え付いたわけですね。それで「メンタル・エイジ」(mental age)、精神の年齢というものをこしらえたんです。これが、ビネーの大きな業績だったんです。それから、「メンタル・エイジ」を、精神年齢、精神年齢と私たちは言うてます。

精神年齢はどうして測るかいいますとね、福祉事務所あたりでもよくひとつ概念を捉まえておいていただきたいことなんですが、精神年齢を捉まえる方法はコロンブスの卵みたいなもんでね、大勢のだいたい五歳なら五歳の子どもの大勢の子どもがどんなことを知っており、どんなことができるかということを調べ上げるのです。そうすると、だいたい五歳の子どもは、こんなことを知っててこんなことができて、常識的なことですけれども、それのスタンダードができるわけですね。今度はそれを標準にしてしまいましてね、何箇条かの標準をこしらえちゃって。逆にどれかの子どもをですね、調べようという時には、その子どもは生活年齢、生まれてから暦の年齢がですね、五歳くらいだっていうなら、四歳くらいから五歳、六歳ぐらいまでのスタンダードをこうあててみるわけなんです。そうしたら、五歳くらいの子どもと同じことがちょうどできたということになる。百点満点やっちゅうことになるとね。そうすると、この人の生活年齢は五歳だし、精神年齢も五歳だと

こういうことになる。ところが調べてみると、四歳のやつもできないし、三歳のやっとこせ満点だったということになると、この人は生活年齢は五歳だけれども、精神年齢は三歳だなということになるんです。そういうふうに、精神年齢というものを標準によって調べるやり方を考えついたのが、ビネーだったわけですね。

それから、アメリカにその考え方が移りましてから、アメリカではいろいろと研究されまして、アメリカの研究の結果は、ＩＱというものをこしらえたのですね。精神年齢でなくてＩＱというものをこしらえました。それは、そうですね、ビネーが発見しましてから、作りましてから六年ぐらいたった頃ですね。アメリカに移って、アメリカでＩＱと。知能指数というふうに訳しています。それですから一九二年ごろですね、知能指数という考え方がアメリカで発生しました。知能指数というのはね、今言った生活年齢で、精神年齢を割ったものその割合です。精神年齢が生活年齢と比べてどんな割合をもっているかということですね。

ですから、今言ったように五歳の子どもさんが三歳の精神年齢をもっている時には、五分の三になるわけです。早い話。五分の三に一〇〇を掛けたものが、ちょうど一〇〇を満点とした場合の割合が出てくるでしょ。五歳の人は五歳の精神年齢なら五分の五だから一ですね。一に一〇〇を掛けたから一〇〇になるでしょ。だから、一〇〇ていうのが普通だということになるわけです。知能指数が一〇〇っていうのが普通だと。ところが、三歳だということは五分の三ですからね、六〇っちゅうことになりますかな。そうですね。ＩＱが知能指数が六〇だということになる。知能指数で言いますと、だいたい平均からどれだけずれてるかということがわかるわけですね。平均点が一〇〇だから。これでみますとね、精神薄弱というのをだいたい七〇ぐらいから下の人を精神薄弱の条件だというふうに見る人があるし、文部省なんかは七五ぐらいから下だと言いますし、国際的にもいろいろ取り決めがあります。そんなふうで、子どものころには非常に知能という問題が鋭敏に響いてきておるわけです。

ところがだんだん歳を取ってまいりますと、今のＩＱなんかでも一六歳というの天にしてますからね、だいたい一六歳までの知能というものでもって、それを満点と考えて、二〇歳とか三〇歳の人だからＩＱはどうなるかというと、一六歳のところまでの発達を示している場合には、二〇歳でも三〇歳でも普通だと考えていくわけです。だから、年齢で割るといいますけども、修正して一六歳というところで天になるような具合に修正しておるわけなんです。こういうものがＩＱです。

ところが、二〇歳になり三〇歳になりますとね、ＩＱで測ったものとは違う働きが出てくるわけですね。それは仕事ができるようになるということなんです。社会の生活ではね、必ずしも知能の測定された知能の評価で決まらないことがいっぱいあるわけなんです。この、体を使って仕事ができたら、頭はそんなにね、使わないでも一人前の仕事をできる人として認められますもんね。例えば井戸堀というような仕事があるとしまして、溝掘りとか掘方始めていや、これは計画を立てる人はかなり知能の高い人が計画立てないとまずいけれども、それを掘って掘ってまた掘って、ていうような場合には、これはあまりですね知能の働きを非常に多く必要としないので、知能的には低いけれどもけっこう一人前の仕事をやる。知能の高い人が、箸より重いものを持たれたことがない人と比べて、どっちが仕事に適性を持っているかっていうことになると、知能の低い人の方が、その仕事に適性を持っているとこういうことになりまして、評価の基準が変わってくるわけなんです。大人になりますと、社会生活の中で。

家庭の台所で一遇を照らすということを言いましたけども、家庭の毎日の暮らしの中で大根を切ったり、ゴボウを刻んだりという仕事は、そうたいして知能的な高まりを必要としない。そういうような面はわりと繰り返す知能をあまり使わない。しかし、それを家計をどうするかとなるととたんに、知能がいるわけですね。家計簿つけてみて、先月と比べてみて、去年と比べてみて、最近の物価高を予想に入れて、来月はどうしようかと、こういう展望などってものは、相当な知能が今後の主婦のためには必要なんです。昔は家庭の主婦なんて、低能、白痴でも、白痴でもということはないけども、いけたものだけど近頃はそうはいかない。そういうわけで、仕事によって、大人の世界は違うと思うんですね。子どもの単純な知能が中心となった生活とは違うものがでてくる。

そこで調べてみますと、日本の国で調べましたら〇・六パーセントぐらいですね。大人の世界で精神薄弱やないかと、こう言われている人のパーセントが。そうすると、子どもの時には三・三パーセント、堅いところ三パーセント、各国で三パーセントと言うてます。〇・六パーセントとの間に二・四パーセントという差が開いたんだけどもね、この二・四パーセントはどこに蒸発したんだろうかということになりましょ。この蒸発というのは、蒸発ではなくて、仕事場に就いていて精薄のように見えないということなんです。

仕事に就いている人をですね、労働の、労働者になっている人、労働に従事している人を「お前さんは子どもの時には精薄だった」っちゅう言って、いつまでもいつまでも追っかけてですね、精薄、精薄というレッテルを貼る必要はないというのが、今日の常識なんでございます。常識でして。ただ、〇・六パーセントというような人の中身を調べてみますと、ただ知能が低いというだけで、ある場合は比較的少なくて、ダブル・ハンディキャップがついているんですね。そのダブルの中では、特に精神病的なダブル・ハンディキャップがついている場合がありましてね、それで正業に就くことが困難だと。単に知能が低いというだけではなくて、その他のいろいろなハンディキャップが一緒にあるために、正業に就きにくいということが〇・六パーセントの中身になっておりますようですね。

それは、民生委員さんとか、あるいは町内のいろいろな役についている方がお調べになった結果が〇・六パーセントとなっています。そういうわけで、社会的適応の社会的な成熟の度合いというのが、知能検査の代わりに登場してまいります。これはその標準というのは、知能検査とは違う標準が定められていまして、ドルという人が、アメリカのドルという人が「ソーシャル・マチュリティ・テスト」(social maturity test)と言っていますが、社会成熟度テスト。社会的にどれだけ成熟しているかということを調べるテストが、別にできております。そういうもので、大人の場合を調べたりすることになってます。

ですから、精神薄弱であるからといって、やたらにレッテルを小さい時からしまいまで貼り通しに貼っておくということは止めて、なるべく精薄のレッテルを剥ぐっていく作業を我々はしなければならない。こういうことですね。

解　題

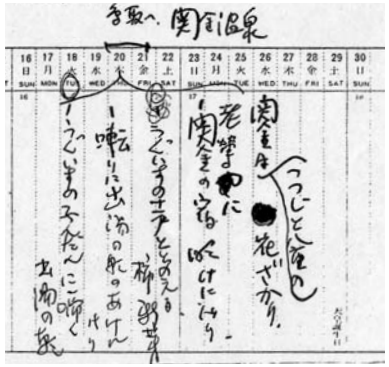
國本 真吾（鳥取短期大学幼児教育保育学科准教授）

はじめに

鳥取県出身で「知的障がい児の父」と言われた糸賀一雄。彼の生誕一〇〇年を平成二六(二〇一四)年に迎え、糸賀が活躍した滋賀県では、誕生日にあたる三月二九日及び三〇日に記念式典を盛大に挙行した。その二週間後、糸賀の故郷である鳥取県でも顕彰フォーラムを実施し、県内外から五〇〇名を超える参加者で賑わった(同年四月一二日、とりぎん文化会館小ホール)。この年、鳥取県では第一四回全国障がい者芸術・文化祭とっとり大会「あいサポート・アートとっとりフェスタ」(同年七月一二日~一二月三日)を開催するにあたり、この顕彰フォーラムをプレイベントと位置づけた。この年の年頭、平井伸治鳥取県知事は県政のテーマを「ともに生きる」とし、糸賀一雄の思想と精神を生かす形で「あいサポート・アートとっとりフェスタ」を成功させるとともに、その精神を障がい者を中心とした県施策の在り方に生かそうという強い意気込みを示した。鳥取県史上、障がいのある人そして糸賀一雄がこれほどまで注目される年は無かったと言える。

本講義テープの資料的価値

本講義録は、長年にわたり鳥取県立皆成学園(倉吉市みどり町。障害児入所施設)で保管されてきたオープンリールのテープから、四五年の時間を経てデジタル化された音源に基づき文字化したものである。皆成学園は、平成二二(二〇一〇)年に園舎の改築が行われたが、その中で糸賀関係の資料が散逸せずによく残されていたと思われる。平成二五(二〇一三)年にはデジタル音源化され、データを収めたCD-ROMが鳥取県立図書館で貸出し可能となった。これを皮切りに、故郷・鳥取県における糸賀ゆかりの品々を探索し、翌年に控えた生誕一〇〇年の顕彰ムードが県内で高まることとなる。



関金で糸賀が詠んだ句のメモ
所蔵:社会福祉法人大木会

常宿だった関金の鳥飼旅館

さて、糸賀が遺した著作物については、生前に出版されていた数冊の著書を除くと、没後に編集された『糸賀一雄著作集』(全三巻、NHK出版)などが市販ルートで手に入れることが可能なものであった。その中でも、柏樹社から出版された『愛と共感の教育』は、糸賀が亡くなる前日、つまり昭和四三(一九六八)九月一七日に滋賀県での講義の壇上で倒れた際に録音されていたものから文字起こしされたものとして知られている(1)。本講義録は、糸賀が亡くなった九月一八日から八か月遡った一月一八日、皆成学園で行った講義の内容である。この講義が、故郷における最期の講義となることは、当時誰もが予想しなかったであろう。

講義の前日、糸賀は関金温泉に宿泊したようである。前後のスケジュールには、厚生省の精神薄弱者福祉審議会の関連会議が予定されており、年明けから慌ただしい動きのようであった(2)。おそらく、この際も関金温泉の鳥飼旅館に宿泊したのであろう。前年の皆成学園重度棟竣工式で訪れた際も関金に泊まり、「関金はつつじと八重の花ざかり」などの句を詠んだことが知られている。それ以外にも、糸賀は幾度となく故郷に戻っては皆成学園を中心に講演等を行っており、本講義の冒頭の内容も特段に改まった口調ではない。

当時は、糸賀の代表著作『福祉の思想』(NHK出版)の出版直前でもあり、本講義録の大半は『福祉の思想』や『愛と共感の教育』などに収められている、晩年の講演や執筆されたものの内容とも重な

る。しかし、公刊されている著作物の中では登場していない（と思われる）「ミットレーベン」という言葉は、本講義の大きな特徴になるものであろう。なぜ、「（と思われる）」としたかだが、滋賀県の糸賀一雄記念財団には、糸賀の遺した原稿・資料で未だ整理されていないものが保管されている。なかには、文字化されていない講演テープも含まれているため、決して鳥取県だけで発せられた言葉という断定は出来ない。とは言え、「ミットレーベン」というその言葉の響きは、半世紀近く経った今日でも色あせず、新鮮に受け止められているのではないだろうか。平成二五年に設置された、倉吉市を中心とした鳥取県中部地区をカバーする権利擁護支援センターの名称は、奇しくも「ミットレーベン」と名付けられている。皆成学園での最期の講義は、学園の職員（指導員・保母［保育士］等）の他、倉吉市内に設置されている鳥取県立保育専門学院（県立の各種学校で指定保育士養成施設。平成二七［二〇一五］年三月末で廃止）で学ぶ学生も聴講したようである。

糸賀が発した「ミットレーベン」という言葉には、「ともに暮らす」という意味が込められている。英語でいう「Live With」の意味合いだが、糸賀いわく「語呂がいいもんだから」、その音の響きからドイツ語の「ミットレーベン」を用いた。障がいのある子どものことを知るためには、「一緒に暮らす」ことが理解のために一番よい方法だという、糸賀なりのメッセージである。糸賀や近江学園の職員たちは、近江学園創設時より住み込みで子どもたちの保護・支援を行ってきた。創設以来、近江学園は「四六時中勤務、耐乏の生活、不断の研究」という三条件を掲げ、その時代時代で職員たちは言葉の解釈を発展・深化させ、学園の理念としてきた。そして、糸賀や近江学園の職員は、障がいのある子どもと「ともに暮らす」ことで、発達の道筋は共通である、タテへの発達だけではなくヨコへの発達などの新たに人間発達の法則性を明らかにし、そして障がいのある子どもたちの発達を保障する実践に取り組んだ。それらの知見は、当時多くの障がい児教育・福祉の関係者に影響を与えることとなった。その歩みの一端を、本講義録からもうかがい知ることができるだろう。

知的障がい児の父、障がい福祉の父

糸賀が学んだ義方尋常小学校
写真提供：米子市立義方小学校

糸賀が学んだ日進尋常小学校
写真提供：鳥取市立日進小学校

本書で初めて糸賀一雄に触れる人もあると思われるので、簡単に来歴を確認する。

糸賀は、大正三（一九一四）年三月二九日、鳥取県鳥取市立川町で生まれた。幼少期、米子に移り住むことがあり、大正九（一九二〇）年、義方尋常小学校（現・米子市立義方小学校）に入学する。その後、鳥取市に戻り、大正一二（一九二三）年に日進尋常小学校（現・鳥取市立日進小学校）へ転校した。大正一五（一九二六）年に鳥取県立鳥取第二中学校（現・鳥取東高等学校）、昭和五（一九三〇）年に松江高等学校（現・島根大学）理科甲類、昭和一〇（一九三五）年に京都帝国大学文学部哲学科へと進学する。大学では宗教哲学を学び、指導教官は京都学派の一人の波多野精一であった。大学卒業後、京都市内の小学校で代用教員を務めた後、昭和一五（一九四〇）年に滋賀県庁へ入職する。戦時下の滋賀県庁では、秘書課長・食糧課長などを歴任した。終戦の翌年の昭和二二（一九四六）年、代用教員時代に知り合った池田太郎、そして滋賀県入職後に池田の紹介で出会った田村二二という二人の教育者とともに、滋賀県大津市石山南郷の地に「近江学園」という児童施設を設立する。

近江学園は、終戦後、行き場を失った戦災孤児・浮浪児、そして知的障がいのある子どもを保護する目的で設立された施設である。

糸賀と近江学園の子どもたち
写真提供：公益財団法人糸賀一雄記念財団

当時、糸賀は三二歳であった。近江学園は設立当初から、教育、福祉、生産、医療、研究の多面的な機能を備えた総合的施設として構想された。設立時は民間施設であったが、昭和二三(一九四八)年には児童福祉法に基づいた施設として、県立に移管される。また、児童の実態の変化や生じてくるニーズの中で、近江学園という幹から様々な関係施設が枝のように分かれて生み出された(落穂寮、信楽寮、あざみ寮、一麦寮など)。その中でも、障がいの重度・重複化への対応から昭和三八(一九六三)年に設置された「びわこ学園」は、西日本で最初の重症心身障害児施設として知られ、糸賀が監修した療育記録映画「夜明け前の子どもたち」の舞台にもなった。近江学園における教育・研究活動から、「重症児が普通児と同じ発達のみちを通る」「横の発達」といった新しい発達観や障がい児に対する指導理念が生み出され、びわこ学園などでの療育実践を通じてさらに深められていった。その成果は、糸賀が残した「この子らを世の光に」という言葉に結実し、多くの教育・福祉関係者にその考えが受け継がれ、今日でも糸賀のことが「知的障がい児の父」「障がい福祉の父」などと讃えられている。

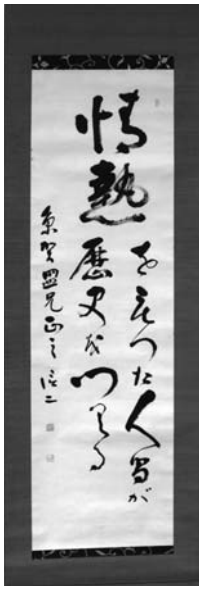
故郷における糸賀ゆかりの品

生誕一〇〇周年を迎えるに当たり、鳥取県では「糸賀一雄氏生誕一〇〇周年記念事業検討会」を組織し、彼の足跡をたどる作業に取組んだ。そこでは、故郷の地で彼にゆかりのある品々がリストアップされた。生誕の地とは言え、一六歳まで過ごした県内で、糸賀にゆかりのある品々の点数には限界があった。昭和一八(一九四三)年の鳥取地震、昭和二七(一九五二)年の鳥取大火といった鳥取市内を襲った災害で、史料が失われていることもあるだろう。高谷清氏が、糸賀の生涯を綴った著書『異質の光』(大月書店、平成一七[二〇〇五]年)を執筆する際、県内で取材を行われた時のご苦労が想像されたのは言うまでもない。

鳥取県では、過去に平成四(一九九二)年に県立図書館開館二周年記念で顕彰展を、平成一八(二〇〇六)年のとっとり県民の日記念事業フォーラムにおいて、糸賀一雄を取り上げたことがあった。また、平成二〇(二〇〇八)年には日本特殊教育学会第四六回大会(於：米子コンベンションセンターBiG Ship)で、没後四〇年の集いが催されたこともある。それらでは披露されていない品を、今回の一〇〇周年記念で…と願っても、簡単には発掘されないだろうと思われた。

従来から、糸賀家より鳥取県に寄贈されたものとして「情熱をもった人間が歴史をつくる」と記された軸の存在は知られていた。これは、県立図書館開館二周年記念の際に糸賀の妻・房より贈られたものである(3)。軸の言葉は、国鉄総裁を務め「新幹線の父」と称せられた十河信二(一八八四～一九八一年)が揮毫したものである。糸賀が師の一人として仰ぎ、そして交友があった十河が糸賀に対して贈ったこの言葉は、糸賀一雄という人物像をよくあらわしている。

映画「この子らを世の光に」のフィルム
所蔵：鳥取県立皆成学園



十河信二揮毫の掛軸
所蔵：鳥取県立図書館

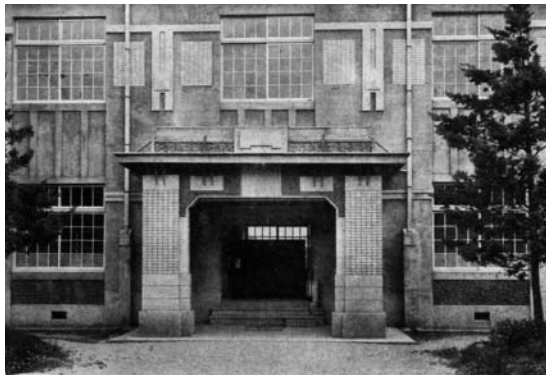
「近江一碧」と署名された皿

その軸以外の品を、この機会に発掘することが検討会の一つのミッションになった。

幸いにも、作業の直前に本講義を収めたテープが発掘され、県内では大きなニュースになった(4)。皆成学園では、この他にも糸賀の著書を原作として製作された映画「この子らを世の光に」(社会福祉法人あさみどりの会。愛知県)のフィルム、学園創設一〇周年の際に糸賀が贈ったと思われる皿(毛筆で「近江一碧」「糸賀の筆名」の銘が記載)なども見つかっている。糸賀が度々訪れていた故郷の施設だからこそ、これらの品々が存在していたことを改めて認識することができ、本県の貴重な財産として後世に引き継ぐ必要がある。

糸賀思想の根底にある二中精神

糸賀一雄の思想や近江学園の実践を振り返った際、糸賀が学んだ鳥取県立第二中学校(鳥取二中)の精神が反映されていると考える。鳥取二中について、『鳥取県立鳥取東高等学校創立五〇周年記念誌』では、「二中の気風、校風には、どこか解放的、自由主義的な、穏和で合理的な思想や、態度を尊重し、育成する基盤が養われていった」と記されている(5)。また、創立に際しては公立ながらも校祖・徳田平市の個人寄付により建設され、林重浩初代校長による特色ある学校づくりがすすめられたこともあり、「県立学校としては異色で、むしろ私立に近い独特の雰囲気が醸成され、他に類例をみない『新しい学校』が誕生した」ともある。糸賀は鳥取二中の四期生として入学したが、在学中は学校創設間もない頃でもあり、二中のシンボルだったマンサード屋根の講堂落成、林校長による「質実剛健ニシテ正義ヲ履践スベシ、己ヲ克治シ他ヲ寛容シテ親和スベシ、勤勉日ニ新ニシテ奉公ノ誠ヲ輸スベシ」という校訓生徒三訓条の成文化、校歌制定など、内外的にも学校としての形が作り上げられてくる時期と、糸賀の学んでいた時期が重なっている。


鳥取二中の玄関と卒業アルバムから
写真提供:鳥取県立鳥取東高等学校同窓会

近江学園では、「ミットレーベン」の言葉の通りに施設児と職員の家族が寝食をともにし、先の三条件(四六時中勤務、耐乏の生活、不断の研究)を掲げ、施設の設備投資や運営資金のために職員は個々の給与をプールして「どんぐり金庫」を設けた。民間施設として始まった取り組みは、やがて児童福祉法に基づき公立施設として県立に移管する。そして、戦災孤児と知的障がい児がともに生活するという、現代でいう児童養護施設と障害児入所施設をセットにした形は、後のインテグレーション・インクルージョンを志向する時代から見ても、先駆的であったと言える。また、子ども・青年の実態やニーズに基づき、二施設から枝分かれして様々な施設が生まれた。

そのような学園の精神は、個人寄付の私費による公立学校の建設、上級生と下級生また生徒と教師の関係においても自由でかつ親和、当初は七年制高校への昇格を志向したなど、「自由快活にして師弟一体の異色ある学園」とも称せられた鳥取二中の校風とも繋がる。仲間とともにこれまでにない新たな施設を作っていく糸賀に、彼が学んだ鳥取二中草創期の姿が重なり合うのではないだろうか。

ミットレーベンの意味を深める

さて、本書の題にもなった「ミットレーベン」に話を戻そう。

本講義の冒頭では、若い学生たちが聴講していたからだと思われるが、「精神薄弱児」を理解するにあたっては机上の学問ではなく、施設で「ともに暮らす」ことが一番の学びであるという趣旨で、「ミットレーベン」という言葉が発せられた。「ミットレーベン」(mitleben)はドイツ語の造語であるが、糸賀が大学時代に学んだ哲学の世界でも用いられている。例えば、西田幾多郎「哲学概論」では、哲学と芸術に関する箇所で、次のようにmitlebenという言葉が登場する(6)。やや長いが引用しよう。

> しかし芸術作品はやはり何かを写すとか、表現するとか考へられる。では何を表現するのかと云へば、私はそれは真実在を写すのだと云つてよいと思ふ。無論、真実在とは何かといふことはむつかしい問題であるが、私は真実在とは我々が直接に体験する生きた生命だと一応云つておかう。時間、空間、因果律といつたもので統一された物理的現象の如きものではなく、ベルグソンの所謂純粋持続の如きものが真実在である。我々はそれを概念的に分析して知るのではなく、云はばそれと共に生きること、即ちmitlebenすることによつてそれをぢかに知るのである。例へば花を見る時に、花弁は何枚あるか、といふやうなことをいくら正確に数へても、それでは真実の花の生命に触れてゐるのではない。我々は花とmitleben〈共に生きる〉ことによつて花の真相に触れるのである。

西田幾多郎は、糸賀の師である波多野精一とともに京都学派を代表する哲学者である。代用教員時代に糸賀が出会い、そして影響を受けた木村素衛は、西田の門下生でもある。西田・波多野・木村は、糸賀の思想を語る上では欠くことが出来ない存在ではあるが、西田は糸賀が京都帝国大学に入学する以前に退官(昭和三[一九二八]年)しており、直接的な接点は無かったであろう。波多野や木村から間接的に西田の影響を受けたと考えられるが、糸賀が発した「ミットレーベン」の語は、まさしく西田が説く「花の真相」の例えと同じである。つまり、障がいのある子どものことを理解するにあたって、その真実在は「直接に体験する生きた生命」としての経験であるということである。西田の「花」を「障がい児」と置き換えた場合、「障がい児とmitleben〈共に生きる〉ことによって障がい児の真相に触れる」というのが、糸賀の言う「ミットレーベン」になる。

本講義の中盤で、糸賀は再度「ミットレーベン」について力説する(文字では分かりづらいが、音声では強い気迫を感じることができる)。

> この産まれている子どもさんたちをがっぷりと抱きしめて、親も施設も教育も、そしてその現実の中から、行動の中から、私たちはこの施設を例えば例にとれば、施設の行動実践の中から、問題を掘り下げて、新しい社会が建設されるための砦としての役割を果たしつつあるわけです。こういう考え方というものを行動的理論と私は言いたいと思うのであります。実践的理論ということを言いたいのであります。大学の研究室で、またはそういう子どもたちとの肌の触れ合い、「ミットレーベン」無しに、立ち止まって傍観者的にものを考えて済むことでは無いということをですね。それを、私は中心に置いて考えて参りたいというふうに思うわけなんです。
>
> 現在の体制に対して補完的役割をしているというならば、それは結構なんであります。しかし、単にこれを補うだけじゃなくして、それは一つの出発への拠点でもあるということを同時に合わせて考えて、そして実践を続けていくのです。それは立派な、正しい政策や施策が確立するように。それは、改良主義と言われても構いませんです。どんなに改良主義だと言われても、今日よりも明日、明日よりも明後日と、正しい施策や政策というものが、この子どもたちの幸せの方向において、築かれていくための努力を社会全体の人と一緒になってやると。一緒になってやる中核には、「ミットレーベン」がそこにあるということ。この「ミット

レーベン」を中核にしながら、この子どもたちの世話をしながら、そして現実を切り拓いていくという新しい未来を切り拓いていくというような働き、ここに本当の意味の国民大衆と共に、そこにソーシャル・アクションが起こってくるという理解の仕方を、私たちは持つべきでないかと思うのです。

糸賀が言う「ミットレーベン」は、単に障がい理解のためだけに、寝食をともにする生活が重要であるということではない。糸賀は近江学園創立六年目に、次のように記している(7)。

> われわれは本来お互いに「今ここに生きている」という実感の中にある。この生命の実感は理屈ではなく、まず何よりも肉体的な感覚であるのだが、この生命の実感の中には、肉体的から精神的なものまでの、実に様々な要素が盛られているものであって、究極するところ、生命は幸福の実現を追求して行く一つの流れであるといえるかも知れない。
>
> デカルトが存在の根源をたずねて「我惟う」と言ったように、メーヌ・ド・ビランは、「根源的事実」を探求してそれを出発駅とし、ベルグソンは「生命の躍動」を説き、西田幾太郎氏(原文ママ)は「純粋経験」を深く味わった。そのようにわれわれも最も端的に生命の根源的事実にさかのぼるような純粋な体験を味わってそれを万人共通の出発駅とするのでなければなるまいと思う。
>
> 此の直観は、一切の意欲を生み出す深い根源であるとも言える。それと同時に、相対に対して絶対を、有限に対して永遠をさし示すものでもある。

ここでの「生命の実感」は、糸賀が言う「ミットレーベン」の中から生まれる。「ミットレーベン」により、「生命の根源的事実にさかのぼるような純粋な体験」を味わい、「幸福の実現を追求」する「万人共通の出発駅」として、「今ここに生きている」という事実が共有されていく。その事実は、傍観者的に立ち止まって考える知識的経験とは違い、現実の社会をそして未来を切り拓く働きく可能性を持つものである。「ミットレーベン」は、その中核であり「出発駅」である。

さらに、本講義では糸賀の有名な「この子らを世の光に」という言葉が明確には登場しないが、「この子」「世の光」について、次のように語られている。

> だから尻を拭いて、尻を拭くというような、鼻をズルズルの鼻をかんでやるというような、手にその感触がいつまでも残るような「ミットレーベン」の中で、初めて発言ができるというような発言もですね、私たちは尊重しなければなりません。それは、一隅を照らしているからであります。そんなことは、天下国家に関係が無いと人は言うかも知れません。言われてもいいです。言われたって構わない。しかし、必ずこの一隅を照らすところから、この子らが世の光となってくるのです。この世の光となってくるこの光というものが、この子らの存在そのものが、光輝いていくような、そういう育てというもの、教育というもの、指導というものが、社会の財産になる。専門職というのは、そういう働きをして下さる方々なんです。

障がい児との「ミットレーベン」な生活は、「一隅を照らす」という営みに他ならない。一隅を照らすことがなければ、光は世の光として輝くには至らないのである。ここでの「照らす」というのは、決して恩恵的・慈善的な意味での光を当てるという意味ではない。糸賀が別稿で述べるように、障がい児は「世の中にきらめいている目もくらむような文明の光輝のまえに、この人びとの放つ光は、あれどもなきがごとく、押しつぶされている。その光は異質の光なのである。文明の輝きになれた目には、その異質の光は、光としてうつらないかもしれない」という存在である(8)。「それをダイヤモンドのようにみがきをかける役割」(9)が一隅を照らすことであり、それは「ミットレーベン」の中から生まれてくるのである。教育や福祉の仕事はまさにそのような磨きをかけていくことであり、「新しい『世の光』」は「この人びとと共に生きようとしている人びとからも放たれている」(10)

のである。糸賀が晩年説いた言葉として、「自覚者が責任者である」という言葉も存在する。言うなれば、糸賀もまた「世の光」であることを自ら自覚し、その責任を果たそうとしたのであろう。

そして、「ミットレーベン」という純粋経験は、「このひとたちが、じつは私たちと少しもかわらない存在であって、その生命の尊厳と自由な自己実現を願っており、うまれてきた生き甲斐を求めていることを友愛的に共感して、それが本当に社会の常識となることへの道行が『福祉』の内容となるのである」(11)。一人また一人とその異質の光を認める人が増え、世の光を受けとめる社会へと変革していくソーシャル・アクションに結び付けていくことが必要なのである。

おわりに

糸賀が故郷・鳥取での最期の講義で発した「ミットレーベン」の語は、半世紀近くの時間を経ても色褪せることなく受け止められよう。山陰中央新報は、平成二六年に「ミットレーベンの誓い・障害児福祉の父　糸賀一雄生誕百年」と題した特集記事を連載した。第一部は七回にわたり、本講義の内容を紹介している(12)。本書と合わせて、そちらもぜひ参照していただきたい。

冒頭でも触れた、鳥取県政のテーマとして掲げられた「ともに生きる」。あいサポート運動(二〇〇九年～)、鳥取県手話言語条例(二〇一三年)など、他県にもその影響を与える施策は、「あいサポート・アートとっとりフェスタ」の開催へと結びつく。また、県内では「ともに生きる」を草の根的に実践していこうと、鳥取県社会福祉協議会が中心となって「福祉の心」を育む福祉教育の実践を、学校教育や社会教育の場で長年重ねてきた(13)。しかし、私たちはこれらの取組みをもって満足したり、そして慢心してはならないだろう。鳥取県における「ともに生きる」取組みが、県民が直面する現実そして新しい未来を切り拓く形で発展していくよう、糸賀の「ミットレーベン」の精神を受け継いでいくことが求められる。そして、十河信二が糸賀に贈った「情熱をもった人間が歴史をつくる」という言葉のように、その言葉に触発され、この地で生まれ育つ若き人々が「世の光」として、新たな時代・社会を築いていくことを期待したい。

【注・参考文献】

(1)ただし、『愛と共感の教育』に収められている最期の講義は、講義時の内容を一言一句忠実に収録したものでは無かった。後に、『糸賀一雄最後の講義―愛と共感の教育―[改訂版]』中川書店、二〇〇九年、として再度公刊されている。

(2)本講義前後のスケジュールについては、野上芳彦(一九九八)『シリーズ福祉に生きる5・糸賀一雄』大空社、所収の「年譜」を参照した。

(3)寄贈にまつわるエピソードは、渡部昭男(二〇一四)「生誕百年・糸賀一雄の魅力を若い世代にどう伝えるか」神戸大学『教育科学論集』第七号、に詳しい。

(4)読売新聞鳥取版「『障害福祉の父』肉声テープ」二〇一三年六月一日付。

(5)鳥取県立鳥取東高等学校創立五〇周年記念誌編集委員会(一九七二)『鳥取県立鳥取東高等学校創立五〇周年記念誌』

(6)『西田幾多郎全集』第一五巻、岩波書店、一九六六年。なお、原文の漢字遣いを改めてある。

(7)糸賀一雄(一九五二)「生活即教育」『南郷』第二号(『糸賀一雄著作集Ⅰ』NHK出版、二五七～二六一頁再録)。

(8)糸賀一雄(執筆年不明)「精神薄弱者を世の光に」『糸賀一雄著作集Ⅱ』四二～四五頁(『福祉の道行』中川書店、二〇八～二二四頁に再録)。

(9)前掲(8)

(10)前掲(8)

(11)糸賀一雄(一九六八)『福祉の思想』NHK出版、六四頁。

(12)山陰中央新報による「ミットレーベンの誓い・障害児福祉の父 糸賀一雄生誕百年」は、第一部(二〇一四年一月五日～二日)、第二部(二月一七日～二二日)、第三部(三月一六日～二〇日)、第四部(四月二日～二五日)と構成されて掲載された。

(13)鳥取県社会福祉協議会から「福祉教育読本・ともに生きる」シリーズとして、中学生版、小学生版、教師版、地域版などが刊行されている。詳しくは、鳥取県社会福祉協議会のHPを参照。

ミットレーベン

故郷・鳥取での最期の講義

2014（平成26）年11月1日 初版発行

著　者　糸賀 一雄

編　者　國本 真吾

発行者　第14回全国障がい者芸術・文化祭
とっとり大会実行委員会

〒680-8570　鳥取県鳥取市東町一丁目220
TEL.0857-26-7157

頒布価格500円

糸賀一雄 生誕一〇〇周年記念出版

ミットレーベン

故郷・鳥取での最期の講義

糸賀一雄（編／國本 真吾）